
虫狩り

海土龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

董狩り

【著者名】

海士龍

N6689D

【あらすじ】

『春眠』から数ヶ月後、中学3年生の夏。偉大な先輩の先例に習つて、イベントを行おうとしている直久に、厄介な条件が出されてしまう。はたして、このイベントを通して、直久はゆずると仲直りできるのか!?

1・年がら年中、元氣！ 天氣！ 勇氣！（前書き）

『春眠』（<http://ncode.syosetu.com/n6626d/>）の続編です。

1・年がら年中、元氣！ 天氣！ 勇氣！

その壁は異様に高く、内と外の空間を完全に遮断していた。けして越えることのできない壁に、ため息が漏れる。

外に出たい。内に入りたい。

内にいる者は外の冒険に憧れ、外にいる者は内の安全に憧れた。だが、結局、内にいる者が外に出れば内に戻りたがり、外にいる者が内に入れば、やはり再び外に出たがるものなのである。

だからこそ、壁はあった。

人は思つ。ここではない、どこかに行きたい、と。どこでも良い、と思いながらも、今いる場所よりも好条件でなければ満足しない。

行き着いた場所が更にひどい場所だと想像しないものである。どこかに行けば、きっと幸せになれる。そう信じている。だが、そうとも限らないから、壁があるのであるのだ。

壁。

それは、本当に壁かもしれない。しかし、壁ではないかもしだい。

一見、壁のようではないかもしないし、目には見えない物かもしれない。

壁は、どこにでもある。だが、どこにもない。

探して見つかるような物ではないが、ないと思つて足を進めていくと、ぶち当たるような物だ。

そのことを、誰もが知っているはずなのに、誰もが壁に気が付かない。

あまりのことに、直久は言葉を失った。

信じられないものを見るかのように、田の前の少女を見やれば、
彼女はヒラヒラと片手を振る。

部屋を出でていけと言うのだ。部屋 そこは生徒会室である。
少女の名は、森岡いづみ。背が高く、ちょっとつり田の彼女は、
生徒会長だ。

口数が少なく、冷たい印象のある彼女とは、できることならば関
わりたくない直久だつたが、今回はそうはいかない。
彼女に頷いて貰わなければならぬことがあるのだ。

「だけどさー。去年はちゃんと許可が出たんだぜ。今年も去年と同じことをやりたいんだよ。んで、バスケット部の夏の恒例行事にしたい
わけ。わかる？」

「それは何度も聞いた」

「それじゃあ！」

森岡はため息をついた。頭を左右に振る。

「何度も言うようだけど。去年、許可が出たこと自体が異例なこと
なの。あり得ないの。分かった？」

「わかるかーっ」

ダン、と彼女の目の前で机を叩き、直久は大声を上げた。

世の中には、偉大な人物がいる。

直久にとつて身近なそれは、深沢高明である。

一つ上の先輩である彼は、去年まで直久と同じバスケットボール
部の部員だった。

彼にボールが渡った瞬間の緊張感。それは同じコートにいなければ分かり得ないことかもしない。皆、思わず息を呑むのだ。
敵も味方も彼を目で追う。

ゴールが吸い寄せているかのようだ。彼が放ったボールは何か別の物のように、ゴールをくぐつていく。手品、いや、魔法のような瞬間。音が静かに体育館に響き、空気を切り裂いた。

歓声。そして、止めていた呼吸を思い出す。

とにかく、一人といない凄い選手だった。

誰よりも上手で、それを傲ることがないので、誰からも信頼されていた。

もちろん、直久も彼に憧れていて、たった2年間であつたが、彼と同じコートに立てたことは、直久にとって誇りであり、自慢でもある。

だが、いくらバスケ馬鹿の直久でも、バスケが上手いだけで『偉大』だとは言わない。

それでも彼を偉大だと言うのは、彼が直久と違つてバスケ馬鹿ではないからである。

成績は常に学年トップ。顔は、どこぞの童話に登場する王子様。つまり、見事なほど整っているのだ。性格も穏やかで、生徒会に推薦されてしまう程の人物である。

非の打ち所がない人間。どこからどう見ても完璧な人間なのだ、深沢高明という人物は。

そんな完璧な人間なんているわけがないと、頭では分かつてはいるのだが、少なくとも直久には彼がそう見えたし、思えて仕方がなかつた。それも、まさに今だからこそ、余計に思う。

偉大な彼が中学三年生だった頃、盛大に行つた夏のイベントがあつた。

ズバリ『肝試し』である。

なんだ、肝試しか、と思うだろう。だが、しかし、中学生が学校行事として肝試しをやるとなると、これがいろいろとややこしいの

である。

どこでやるのか。どれほどの人数でやるのか。その安全性は？夜分遅くなりすぎるな。近隣付近の住民に迷惑が掛からないようにな。

中学生としての節度を守つて……云々。

だいたい教師ってヤツは、灯りのない場所での生徒をまるで信頼していないのである。

確かに、教室を暗くしただけで開放的な気分になり、騒ぎ出す生徒がいることは事実だ。

見えない場所、監視できないところでは、いつたい何をしてかすのか分からぬと思つてゐるのだ。

まあ、それはそうなんだけど……。

いかに教師や親、大人の目から逃れ、楽しくやるのが子どもの遊びの醍醐味じやんか！

そうだろ？

とにかく、深沢高明という偉大な先輩は、教師軍の反対を制して、見事イベントを行つたわけだ。

この先例に習つて、直久も肝試し大会を企画したのだが、どうしたわけか、まったく案が通らない。しかも、こともあるうか、教師軍と対決する前に生徒会で『待つた』をくらつてしまつたのだ。

「どーすんだよ？ 直久」

木村史宏。バスケ部の部長である。生徒会室を出て、彼が一番に口にした言葉がこれであった。直久はその場に頭を抱えてしゃがみ込んだ。

「森岡だよ。森岡！ あいつさえ何とかすればっ！」

「生徒会は盲点だったよな。そうだよな。去年は深沢先輩が生徒会長だったもんな」

本人がそうなのだから、生徒会に反対されるわけがない、と木村は零した。

そして、直久同様その場にしゃがみ込む。

「その上、先輩は先生方からの信用もある。説得できたわけだ」

「それに比べて、俺らは……と言えば」

「おバカで有名な大伴直久と」

「同じく、単細胞で有名な木村史宏だもんなん~」

はあ~、と二人はため息を付いた。

耳を澄ませると、演劇部の発声練習の声が聞こえてくる。放課後なのである。廊下はしーんと静まり返り、人影すらない。音は遠い。

そのままジッとしていると、ボールをつく音が響いてきた気がした。

「ああ。みんなになんて言えれば良いんだよ!~?」

昨年のイベントでの盛り上がりと、それと同じくらいの盛り上がりを期待している仲間たちを思つて、直久は再びため息を付いた。そんな時だ。ふと、視界が陰った。なんとなく予感がして、直久は見上げるごとになく片手を振った。

「俺、今、元気ないから、やさしくしてくれなきゃ、ヤダぞ」

「そうなの? 直ちゃんらしくないね」

「俺だって、年がら年中、元気! 天気! 勇気! じゃないんです!」

「ふ~ん」

疑り深そうな声を響かせて、気配はすぐ脇にしゃがみ込んだ。体温を伝えるかのように軀を寄せて、直久の顔を覗き込んでくる。直久は眉を寄せた。耐えきれず、自分とそつくりな顔を見上げ、叫んだ。

「聞いてくれよ、数一ひどいんだ。てか、世の中ぜつてえー、間違つてる!」

「そうなの?」

「そうなの! そうなの!」

ああ、のんびりとした口調が憎い。なんでこんなにも弟はのほほ

んとしているのだろう。

弟 数久は直久の双子の弟である。

一卵性双生児であるため、まるで鏡に映しているかのようにそつくりだ。

そして、自分で言つのもなんだが、自分たちの顔はそこそこ良い。弟の顔を見つめていると、ついついうつとりをしてしまう。

と・に・か・く、俺はこの顔が好きだし、弟のことも大好きなのである。

だから、顔を近付けられて耐えられるはずがなく、弟に抱き付いた。

「……あのう、直ちゃん。ちょっと苦しいんだけど?」

「数う！ 聞いてくれよ！ 聞いてくれよ！ 聞いてくれよ！」

「聞くから。聞くから、離してよ。 木村君もビックリして見て
いるよ」

「いや、俺は慣れているから……」

木村と直久は、中学1年生の時からの付き合いである。

当然、木村は数久のことも知つており、この兄弟の仲の良さも承知していた。

どうぞ続けてくれと言つ木村に甘えて、一頃り数久の温もりを味わつてから、直久は躰を離した。

道路が赤く濡れている。

東の空は藍色に染まつており、それは西に向かつて紅く色を移している。

見事なグラデーション。だが、積雲が空に影を作り、色を狂わせていた。

夕日が綺麗に見えるほど、大気が汚れている証拠なのだと呟つ。

照らされ、赤く染まつた道路さえ綺麗な夕日は、どれほどの大気の汚れを訴えているのだろうか？

そんなことを思いながら、直久は神社の鳥居をくぐつた。

二人の家は先見神社の裏にある。

裏 正確に言えば、家と神社は中庭を渡らせた回廊で繋がつている一つの建物だ。

詳しい事はよく知らないが、神社の境内や境内建物は税がかからないのだそうだ。

つまり、こうして社と家を繋げておけば、庫裡として課税対象から外されるんだとか……。

鳥居の先は石階段となつており、それを登りきつてもまだ石畳が続いている。

石畳の両脇に狼の石像が建つていて。普通、この場所には狛犬があるものだが、先見神社やここいらの神社では狼なのである。

狛犬よりもスマートな肢体を、右側の狼は、今にも獲物に飛び掛かろうとしているかのように、低く屈めている。一方、左側の狼は参拝者を上から静かに睨み付けている。ギョロリとした獸の眼が、いかにも恐ろしげだ。

なぜ狼なのか？

それには説明するのも面倒臭い理由があるのだ。
これは千年とちょっと昔の話だ。

その頃、大活躍していた陰陽師がいた。安倍晴明っていう奴だ。
そして、もう一人の陰陽師 大伴泰成の不幸は、生きた時代が晴明とバッタリ重なつていたことだった。

更に不幸なことに、泰成は極度の負けず嫌いだった。晴明の力を妬み、またその功績を羨んで、彼に対抗できる力を欲したことがすべての発端である。

泰成は強力な式神を探していて、銀色の雌狼と出会つた。

ここで、マジですか！？と耳を疑いたくなるような出来事が起きてしまう。

なんと泰成は、この妖狼との間に子を儲けてしまうのだ！

そして、その子 小夜こそが俺たちの祖先なのだという。

ちなみに、小夜は九匹の妖狼を式神とし、晴明以上の陰陽師になつたと、

九堂家と大伴家だけに伝えられている話があるが、これも人と狼との間に子ができてしまう話と同じくらいにアヤシイ話だと思う。

ま、そんなわけで、小夜の九匹の式神にあやかつて、ここいら九つの神社は、狛犬ではなく狼なのである。

不意に、数久が口を開いた。

「つまり、森岡さんと先生方に催眠術をかけられれば良いってこと？ 操つて、肝試しの許可を貰えば良いの？ ……でもさ、直ちゃん。催眠とか暗示とかつて、僕より姉さんや貴樹さんが上手だよ。僕はちょっと自信ないなあ」

「な、なんの話だよ。何の！？」

愛しの弟は直久の話を黙つて聞いてくれていたかと思えば、とんでもなく物騒なことを考えていたらしい。

人を操るだつて！？

肝試しのためにそこまでやつてくれとは言つていらない！

だいたい、催眠術だの何だのつて、そんなこと、できるのかよ？

……つて、できるんだよ、数たちは！

なんでも、うちの家系は代々霊能力 と言うか、人間離れし過ぎて、あり得ない力を持つた者たちが頻繁に生まれる家系なんだとか。

数もそのうちの一人で、姉の鈴加や従兄の貴樹なんかもそうだ。ところがどつこい。数久の双子の兄である俺はまったくの常人！

靈感？ 超能力？ そんなもん、ない！ 不い！

直久は両腕を広げて、肩を竦め、大げさにため息を付いた。

「数。考えてくれたのは嬉しいんだけど、もつと人間的解決法を、俺は求むね」

「そう」

数久は薄く笑みを浮かべて、小さく息を漏らした。

社を横目に、神社の裏手に廻る。夏はもちろん、冬でさえ緑が茂っている場所に、木々に隠されるように古風な日本家屋がある。これが、我が家だ。

鍵の掛かっていない引き戸を開けると、インターフォンいらすの大きな音が立つ。

それでも家の者が客に気付かない場合は、客は玄関から内に向かって大声を上げることになつていて。

インターフォンがマジでない家なのだ。それがこの家を訪れた客の決まりとそれでいた。

ちなみに、この玄関の引き戸は、昼でも夜でも常に鍵が開いている。

なんて物騒な！と思つだらう？

なんでも、うちの母親が言うには、神社全体に結界が張つてあるから、悪しき者は侵入できないんだそうだ。だから、神社内にある家も大丈夫なんだとか……。

なんだよっ。その、悪しき者つて！？

玄関を上がつて、すぐに自室に行こうとした直久の袖を、数久が掴んだ。

怪訝な顔で振り返ると、数久は口元に拳を押し付けている。これは、彼の考えてこる仕草である。目を伏せ、廊下をジッと探るように見つめている。

「何だよ？」

「何がが通つたみたい。人ではないモノ」

「人ではないモノ？」

ギヨツとして数久が見つめているものを見ようと、直久も目を伏せた。

廊下。板張りの廊下で、歩くとミシミシと悲鳴を上げる。古いのだ。

母親がこの廊下を掃除しているところなど見たこともないのに、

塵一つ落ちていない。

きっと、母の式神が掃除をしているのだろう。

てか、あの母上様にさせられているのだろう。哀れな。

直久は首を傾げた。

「数、いつたい何を見てんだ？ 僕には何も見えないけど？」

「赤い筋みないなものだよ。気配って言うのかな、これ。それとも、残像が見えているのかな？ 残留思念とか？ …… キラキラしている。きっと、悪いモノではないよ」

ホツとしたように笑い、数久は廊下の先を見やつた。
おそらく、その赤い筋とやらを目で追つたのだろう。

「玄関を通つて、あっちに行つたみたい」

「あっち？ …… 鈴加の部屋の方？」

「そうみたい。行つてみよ」

そう言つと、返事も待たず、数久は直久の裾を掴んだまま歩き出
してしまつた。

2・次元？

一応、乙女の部屋なので、ノックをする。返事はすぐにあった。

数久は鈴加の部屋の扉を静かに開いた。

鈴加は4つ年上の姉で、ただ今、花嫁修行中である。

過去、幾度も弟たちに靈界への入り口を見させてくれた狂暴かつ最強の姉上様を、嫁に欲しいと言つてくれた酔狂な人物は、従兄の貴樹だ。

もつとも、直接、彼に事の真相を聞けば、彼自身は一言も『鈴加を嫁に欲しい』などとは言つていないのでそうだ。

自然の成り行きというか、不可見力に強制されたのだ、と言う。

「こんにちは」

澄んだ声が響いた。鈴加の部屋の中からだが、明らかに鈴加のものではない。客のものだ。

赤く、長い髪を持つ少女。16歳　いや、15歳。もつと幼くも見える。

直久は目を瞬いた。赤い髪だと思ったのは、どうやら錯覚だったらしい。

夕日にでも照らされていたのだろう。少女の髪は黒髪だった。

「千秋さん、お久し振りです。いつ、こちらへ？」

「さつきよ。一人とも大きくなつたね」

「あと1年したら、千秋さんに歳が追い付いちやいます」

「もう、あれから3年が経つたんだもんね。早いわね」

3年前、異世界へ帰った少女がいた。永尾千秋　鈴加の友人の一人だ。

直久と数久は鈴加の部屋に足を踏み入れた。彼女の部屋は、純日本家屋には似つかわしくない洋装をしている。

床はフローリングで、薄ピンク色の絨毯が敷かれている。広さは

8畳ほどので、ベッドが占める割合が大きい。窓際には、もはや不要の勉強机があり、その隣にはクローゼットなんてものまであった。

絨毯の上に小さな丸テーブルがあり、鈴加と千秋はそれを囲うよう位に座っていた。鈴加が千秋の隣に尻を移動させ、座るように指示するので、双子も習って席に着く。

「俺、未だによく分からんんだけど」

口を開いたのは直久だった。千秋の顔を伺いながら、言葉を放つ。

「千秋さんは異世界の人なんだよね？」

「生まれは、こっちだけどね」

「俺さー、異世界って言われてもピンと来ないんだ。千秋さんの世界って、どこにあるの？ どうやって行くの？ 千秋さんは行き来しているわけだから、行けないような場所じゃないよね？」

「うーん。どこって言われても……」

千秋は眉を寄せて、視線を空に漂わせた。しばらくあつて、ポツリと零す。

「中国の影」

「へ？」

「誰だつたかな？ 私も同じような質問をしたことがあつてね。その時にそう言われたの。中国の影にある世界だよ、って」

「へえ。それは初耳。……そう言えば、私の知り合いで、前世は『中国の裏』の世界で生きていたという人がいるわよ」

「何？ その人、マフィアとか何か？」

直久がギョッとして言つと、鈴加は、バカね、と鼻で嗤つた。

「なんでそうなるのよ。今は異世界の話をしているんだから、中国の裏にある世界のことに決まっているでしょー。マフィアは、中国の裏社会ー！」

「……その人って、日岡さんのこと？」

「そうよ。あの人って、ホント、いいカモなのよ！ 何とかつてい

う会社の社長さんだから、お金いっぱい持っているしー氣前良いし！」

「カモつて……。鈴加ちゃん、まさか、あくどい商売しているんじゃないよね？」

「まさか」

「とんでもない、と鈴加は両腕を大きく広げた。

「何年か前の話なんだけど、前世で、来世を誓い合った相手がいるんだけど、その人にその誓いを思い出させてくれ、って依頼を受けたの」

「おおっ！ ロマンチックじゃん！」

「でっしょ！ ……でも、いきなり『貴方とわたしは前世の誓いで結ばれた仲なんだ』って言わても、『誰コイツ、変な人』って思われるのがオチじゃない？ だから、どうしたら良いかって、話よ」

「で？ どうしたんだよ？」

「田岡さんね、趣味で小説を書く人だったわけ。しかも、前世での自分を主人公に書いていたの。私は思つたわね、使えるつて！」

鈴加は拳を作り、ドンッと机を叩いた。皆の視線が一瞬その拳に集まつた。だが、すぐに鈴加の顔に目を戻した。

「小説を読んでいて、そこに書かれている前世での自分の名前を見つけると、前世の夢を見るという呪をかけたの」

「そんなことができるの？」

「なんか、できちゃつた。初めてやつてみたんだけど、やれば出来るものね」

「鈴加ちゃん、すご~い」

「スゴイって言うか、あり得なくない？ なんで、つなんことが出来るんだよ」

「鈴加様だから？」

真顔で即答してくれた姉に、直久は顔を引きつらせた。数久がす

ぐ横で笑みを漏らした。

「姉さん、催眠とか暗示は得意だからね。その応用をしたんでしょう?」

「『は』って何よ。失礼ね。予知も得意ですぅ!」

「そうでした。失礼致しました」

仰々しく頭を下げる数久に、鈴加は満足して、言葉を続ける。

「呪をかけた本をターゲットに読ませて、夢を見させ、徐々に前世を思い出させることに成功したわけだけど、その後もいろいろあってね。なんたつて、日岡さんと相手の女の子、15歳差なわけ!障害にぶち当たる度に相談しに来てくれて、こちとら相談料チャリーノよ!」

あははははっ、と鈴加は声高々に笑った。

「り、りん、鈴加ちゃん! それ、あくどいって言わないの!…?」

「言わない。言わない」

「世の中、間違ってる……」

うちの家系は神社経営の他、生まれ持つた特殊な力を使って商売をしている。

特に我が家では、小遣いがない代わりに、儲けたお金はそつくり丸ごと自分のポツケに入れて良いことになっているから、こうして鈴加が高笑いしているわけだ。

対して、泣くしか術がないのが、0能力者の直久である。

毎月、母親に泣き付いて、わずかな小遣いを貰っている。

「前世つてさー。普通、覚えていないものじゃない? つまり、覚えている必要のないものなわけ。それを覚えているのって、執念深いというか、よほど想いが深かつたんだろ? と思うわけ。それって、ある意味、不幸だと思わない?」

ふと、鈴加はポツリと言葉を零した。

それはまるで日岡の瞳の濃さを思い出すかのようだった。

「好きって想いは、深いほど、強いほど、重荷になっていくと思わない? 私は思うわけよ。だからこそ、ストーカーなんてもんが現

れちゃつたりすると思うの。想いが深すぎるのよ。想いが深すぎる人つて、不幸だわ。みんなが皆、その人と同じだけ深く想つてゐるわけじゃないから。きっと、想いは報われない。きっと、誰も100%は理解できない」

だけど、と言葉は更に続く。

「日岡さんの場合、それでも自分の想いを理解して貰おう、受け入れて貰おうとしているわけね。そんなの、相手にとつて迷惑なことでしょう？だからこそ私のからのペナルティなのよ。お金で済むんだから、平和なものじゃない！」

「金で、平和つて。……おいおい、ちょっと待て」

「結局、言いたかったことは、姉さん自身の言い訳かあ。しかも、言つていること、むちゅやくちゅ……」

「私は、正しい…」

ビシッ、と言い切つた鈴加に、双子たちは、やれやれと肩を竦める。千秋は声無く、目だけで微笑んだ。

「ちなみに、今、その本はお役御免になつて、本家の蔵に収納されているわよ。一応、危険物扱いだから、回収させて貰つたの」

「関係ない人まで読んで、前世を思い出しちゃつたら、大事になるかも知れないからね。読めば前世を思い出す本だなんて、週刊誌の記事になつても嫌だし」

「そうそう。それで、話を戻すけど。異世界はどこにあるのかつてことね」

いきなり、ドツと話が戻り、直久はガクリと拍子抜けする。そう言えば、元を正せばそういう話をしていたのだ。

「まず、最初に押えていて欲しいこととしては、世界つていうのは、とにかくいっぱいあるものなの。妖怪は妖魔界つてここにいるわけだし、悪霊は、この世を彷徨つているものだけ、本来は靈界にいるべきものなのね。他にも、魔界やら神界やら、冥界やらがあるの」

「それらがいつたいどこにあるのが、と言えば、ここだとしか答え

る」とはできないんだ」

鈴加の言葉を継いで、数久が口を開く。自分と同じ顔に真っ直ぐ見つめられて、直久は少し眉を歪ませた。

「ここって？」

「ここだよ。つまりね、『中国の影』にある世界とか、『中国の裏』にある世界という風に、中国という場所にいくつもの異世界が存在するように、地球にはいくつもの世界が混在しているんだ。神界も魔界も冥界も靈界も、あらゆる世界が地球という一つの星に重なり合つよう混在している。いろんな説があるんだけど、僕たちは、天国は靈界の一部で、地獄は冥界の一部だと思っている。この世界で死んだ者の魂は、この世界と重なり合つ靈界か冥界に行く。じゃなかつたら、他の星で死んだ者も同じ靈界や冥界に行くことになってしまふでしょ？ 宇宙には何万何億という気が遠くなる程の星々があるんだよ。全宇宙の死者がみんな同じ一つの場所に押し寄せたら、すごいことになると思わない？」

「要するに、星それぞれに、靈界だか冥界だかがあるってこと？」
人間、虎も牛も、宇宙人も、小さな箱の中にギュウギュウと押し込められている図を想像して、直久は滑稽に思う。

だが、笑つてはいられない。数久の話は理解しがたいことだった。

一つの場所にいくつもの世界が重なり合つている。

直久は、それじゃあ、と立ち上がった。

「ここに俺がいるじゃん？ 今、俺が立つている場所つて、この世界のこの場所じゃん。今の話を聞くと、靈界とか、他の世界にもこの場所があるってことだろ？」

「……靈界にもこの世界と同じ場所があると言つより、直ちゃんが立つてている場所にいくつもの世界が折り重なつていてると言つた方が正しいかな」

「どう違うんだ？」

首を傾げる直久に答えたのは鈴加だった。

「ここ 私の部屋が靈界にあるってわけじゃなくて、私の部屋

がある場所にも靈界が重なり合っているつてことよ

「はあ？ どういう意味だ？ ちょっと待て。……それって変じゃねえ？ だつてさー、例えば、この世界で俺が立つているこの場所に、靈界でも同じように立つていてる人がいるとするじゃん。どうして、見えないんだ？ ぶつかつたりしないんだ？」

「次元が違うからだよ。靈界だけじゃなく、魔界でも、神界でも、直ちゃんた重なり合うように立つていてるモノがいるかもしねない。だけど、次元が違うから、その姿は見えないし、触れ合つこともないんだ」

「次元？」

「次元についての説明は難しいから、バス」

「私も感覚的に分かる程度だから、説明は無理よ」

顔を見合わせて、お手上げのポーズをした一人が、なんとなく分かつた氣で聞いて、と言つので、直久は肩を竦めて頷いた。

「次元が違えば、その世界はけして混じり合わないものだけど、言葉じや説明できないほど次元つていうものはあやふやなものなんだ。なんかの拍子に、二つの世界の次元が合い、世界が混じり合つてしまふことがあるんだよ」

例えは、と直久は人差し指を立てる。

「この世界と靈界を例に上げると、幽靈が見えるつていうのがそれ。幽靈つていうのは、死者のことだ、死者は靈界にいるもの。だけど、時々、こちらの世界と靈界の次元が合い、こちらの世界にいる者が、靈界にいるはずの死者の姿を見てしまうことがあるんだ」

「元々、この世界と靈界は、他の世界に比べて次元が合い易いしね」「合い易い、合い難い次元を持つ世界があるわけ？ 相性があるとか？」

「あるわよ。この世界と靈界がそう。あと、魔界と冥界。冥界と靈界。天界と神界なんかがそうね」

「へー」

「偶々次元が合つちゃって、異次元間で互いの姿が見えてしまって

いる状態ならば、幽靈だらうと妖怪だらうと無害なんだけど、なんかの拍子に次元を越えちゃうヤツがいるの。そういうヤツらを元の世界に戻すことを、私たちは『除霊』って言つてゐるわ」

「 そうだ。次元を、壁と壁に区切られた空間だと考えてみたら？ 僕たちの世界と靈界との間にある壁は、ベニヤ板みたいな薄く頼り無い壁なの。そんな壁をぶち破つて、僕たちの世界にやつてくる惡靈がいる。それらの力を奪い、一度と壁を破ることのないようにして、靈界に戻してやる」

「それが、徐靈？」

「 戦つて、力を奪い、おとなしくさせる。壁に穴を空けて、元の世界に帰してやる。んで、穴を閉じて、おしまい。これが徐靈よ。簡単に言うけど、次元を越える方法さえ分かれば、一步も動くことなく、靈界、神界、魔界を行き放題なわけ。ただ、私たちには、靈界、冥界、魔界、天界程度の次元しか越える力はないわ。私、一度で良いから、妖精界つてどこに行つてみたいのよねー」

「 妖精界は、靈界に穴を空けてから、天界を通つて、妖精界か。靈界に穴を空けて、冥界通り、更に妖魔界を通つてから行くんだよね。確か……」

「 数久、行つたことあるの？」

「 ないよ。本家の蔵にあつた資料を読んだんだ。大昔に行つた人がいるみたい」

「 なかなかあなどれないわね、御先祖様も」

そう言つて笑つた鈴加に対し、直久は腑に落ちない顔をして、再び席に着いた。

「 地球上にいくつもの世界が重なり合つてあるつてことは、分かつたけどさー。千秋さんの世界や、その鈴加の力モ……田岡さんって人が前世で生きていた世界は、靈界とか魔界とかとは違つ氣がするんだけど？」

「 そうよね。違うわよね」

それまで黙つて聞いていた千秋も、直久の言葉に深々と頷き、鈴

加の方を見やつた。

鈴加はわずかに肩を竦め、口元を緩ませる。

「一言で異世界と言つても、一種類あるのよ。今まで話していたような異世界を、私たちは人外世界って呼んでいるんだけど、もう一つの異世界の方は、パラレルワールドと呼んでいるの」

「パラレルワールド？」

「要するに、『もしもの世界』よ。もしも、あの時、あんなことをしなかつたら……。もしも、自分が、ああだったら……の世界」

「つまりね」

数久は鈴加の勉強机の方を見やると、その上に転がっているペンを指差した。

ペンは数久の指の動きに合わせ、空を移動し、次の瞬間、コトンと床に転がった。

「なんつーことをしたんだ。数！」

「念力つていうのかな？　」*Psychokinesis is?*

「PK？　世間の一般人なら、超能力だつて言つんだらうけど、私たちのこれはそんなレベルじゃないからね」

分からぬわ、と言いながら、鈴加もペンを空中に浮かせ、クルクルと回す。

数久は床に転がっているペンを再び指差した。

「直ちゃん、いい？　例えば、今、ペンが床に落ちた状態を『この世界』とする。この時、パラレルワールドは『もしも、あの時、ペンを落とさなかつたら……の世界』だよ。もつとも、これは極端な例だけどね」

「更に、私がそのペンを拾い上げたとする。すると、『もしも、あの時、鈴加がペンを拾わなかつたら……の世界』がパラレルワールドとして生まれるの。でも、実際はペンは拾われることなく転がっているわけだから、今の私たちにとつては、『もしも、あの時、鈴加がペンを拾つたら……の世界』がパラレルワールドなわけ。分

かる？」

直久は眉を寄せる。

「それって、すごくたくさん世界ができない？ もしも、もしも、なんて言い出したら、人間、切りがないじゃん？」

「そうよ。切りがないのがパラレルワールドなの。一秒、一秒で、何万、何億という世界が生み出されているってわけ」

鈴加は空で回していたペンを丸テーブルの上に放り、数久が床に転がしていたペンを己の手で上げると、やはりテーブルの上に放った。

一本のペンが、コツリと音を立ててぶつかり合った。

「ちー子の世界も、そのパラレルワールドの一つだと思つた。中国っぽいんでしょ？」

「うん。かなりね」

「つまり、歴史のどこか、おそらく、ずっと昔に生まれた『もしも』で、この世界と分岐した世界なのよ」

「田岡さんの世界もそうだと思う。僕、田岡さんの小説『仮想史』って言つんだけど、それ读懂んだんだ。読んで分かつんだけど、すこく三国志に似ているんだ。登場人物たちの関係とか立場とか。峨？は曹操に似ているし、蒼邦は劉備に似ている。つまり、峨？はパラレルワールドの曹操であり、蒼邦はパラレルワールドの劉備なんだ。だから、きっと、『仮想史』の世界は、こちらの世界で言う三国志時代より少し前で分岐してできた世界なんだよ」

「すると、ちー子の世界は、『仮想史』の世界よりも更に以前に分岐した世界なのかもね。パラレルワールドは分岐した時期が今に近いほど、似た世界になるから」

分岐した時期が古いほど、世界の違いは大きい、とも言い換えて、鈴加は言葉を続けた。

「こんなことって、よくない？ 確かに鞄に入れておいたはずなのに、確かめてみると折り畳み傘が入っていないってこととか。やつた覚えのない宿題がやつてあつたり、置いておいた場所から物がなく

なつたり、そこはさつき捜したはずなのに、今見たら、ある……

みたいな感じなこと

「あるような、ないような……」

「大抵の人は、自分の記憶違いと思つようなことよ。実は、それは、パラレルワールドに迷い込んでしまつたからな」

「ある行動を実行した世界と、しなかつた世界。些細な『もしも』であればあるほど、その一つの世界の境になる次元 壁は脆い。曖昧なんだよ」

「簡単に、迷い込んでしまう恐れがあるのが、パラレルワールド。今までいた世界とそんな変わらないパラレルワールドなら良いけど、まるで違う世界ってこともあるから、大変なの」

「今までいた世界とそんなに変わらなかつたら、自分がパラレルワールドに迷い込んでしまつているという自覚もなく、そのままパラレルワールドで生きていくこともできるけどね。まるで違う世界だつたら、泣くよね。帰りたいって、思うよね。だけど、行き来が難しいのがパラレルワールドなんだ」

「次元なんて、なんかの拍子で越えられちゃうもの。自分の意志で越えたくて、越えたわけじゃない。行きたくないのに行けちゃったり、どんなに行きたいと望んでも行けなかつたり。そういうもんなの。いつ、どこで、一つの世界の次元が合うとも予測できないし、自分で次元を呑わせようたつて、さつきから説明しているように世界はたくさんあるのよ、行きたいと望む世界を容易になんて見つけられないわ。例え行き着くことができても、帰ることはできないっていうのがパラレルワールドの原則だしね」

ふーん、と直久は鼻を鳴らした。分かったような、いまいち分からぬような気分だ。

「結論を言つと、千秋さんの世界は、俺達の世界で言つ中国に重なり合つよつてあるたくさんの世界のうちの一つの世界で、その世界に行くためには、なんかの拍子で次元を越え、運良くたどり着くことを祈るしかないとことだよな？」

「うん。だいたいそんなカンジ」

「でもさー。千秋さんは行き来しているわけじゃん?」

「なんで?と聞くと、千秋はニコッと微笑んだ。代わりに答えたのは、鈴加だ。

「ちー子は人じやないからね」

「え!? 人じやないの!?」

「だつて、直ちゃん。千秋さんつてば、16歳のまま、全く変わつてないじやない」

成長してもいなし、老けてもいない、と数久は続ける。

鈴加と同一年のはずなのに?

直久は、鈴加と千秋を見比べる。言われてみると、千秋は鈴加と同級生というよりも、自分たちに年齢が近いように見えた。

「ちー子はちー子の世界の神獣なんだつて。私はよく知らないけど。そななんでしょ?」

「うん」

「なんだか分かんないけど、千秋さんつて、すごい?・す、すごいのかもしれない。」

言葉なく微笑む千秋を見やり、直久は頬に汗を伝わせる。

鈴加や弟、親族たちが人間離れしていることは承知している。だが、それでも、腐つても人間だ。人間を逸脱してはいない。

ところがどつこい。千秋はマジで人じやないのだ。神獣なのだと

言つ。

神獣つて、ただの獣じやなくて、『神』の字が付いているわけだから、普通じやないカンジにスゴイんだろうな。きっと!

直久は、何をどう驚いて良いのやら、何をどう理解したら良いのやら、もはや分からないと頭を抱えた。

3・マジで来てくれたんですねー

鈴加は数久にお茶を入れてくるように言つと、テーブルに頬杖を付いた。

数久は黙つて従い、部屋を出ていく。それを見送つてから、鈴加は口を開いた。

「今年の私の夏の目標は、異世界旅行よ」

「異世界旅行？」

「そう。ちー子の世界に行つてみようと思うの。あっちには、もう一人私の友達がいてね。その子 菜穂子は千秋と違つて、人だから、次元を越えられないわけ。私が会いに行つてあげないと、一生会えないのよ」

「鈴加ちゃんが来てくれば、なほちゃんも喜ぶと思う」

「だけど、行けるのかよ？ パラレルワールドって、簡単には行けないものなんだろ？ うまいこと行けたとしても、帰つてこられないのが原則だつて……」

「あんた、私を誰だと思っているのよ。鈴加様よ？ そこらの一般人と一緒にしないでよ。私に不可能はない！ 為せば成る！ 為さねば成らぬ、何事も！」

ガツと立ち上がり、ダン、と足をテーブルに掛ける鈴加。拳を振り上げ、だあー、と吼えている姿は、ハッキリ言つて、自分の肉親だとは思いたくない。直久は顔を引きつらせた。

そんな直久の様子に気付き、鈴加は足を振り上げ、振り下ろす。見事、踵落としが直久の脳天に直撃。痛がる弟に満足して、鈴加は再び腰を下ろした。

「ちー子が道案内してくれれば、次元の狭間で迷うことなく行けると思うのよね。後は、私が力を加え、貴樹がコントロールする。そうすれば、次元を越えた時の影響が、あちらの世界もこちらの世界

も受けずに済むと思つのよ

「影響?」

「そりゃあ、あるわよ。だつて、次元なんてそういう越えられないものでしょ? 越えられなによつになつてているのは、越える必要がないから。必要がない……と言つより、越えてはならないことなかもしれない。越えることなく、満足するべきことなのかも。それをわざわざやるからには、それなりの代償を負うわ

「そういうもん?」

鈴加が頷くと、千秋も目を細めて頷いた。

「世界を渡る時、その影響で嵐が起きてしまうの。私一人なら、強い風が吹く程度だけど、他に人を連れて渡ると、大きな嵐になつてしまふの」

「大丈夫よ。嵐が最小限で済むように、努力するから。ちー子の世界を荒らしたりなんて、しないわ。鈴加さんを信じなさい」

「うん。信じてる」

数久がお盆を片手にして、戻ってきた。緑茶の入った湯飲みを千秋に、そして、鈴加、直久の前に置いていく。最後に自身の前に音もなく置くと、先程座っていた場所に腰を下ろした。

「何の話?」

「夏休み計画の話よ

「夏休み計画? 直ちゃんは肝試しを計画中なんだよね」

「肝試し?」

面白そうと言つたのは千秋で、鈴加は眉を寄せた。

「今年もやるの? やれるの? 誰、主催?」

「俺。生徒会から猛反対を受けている」

「そりやあ、そうよね。あんた、計画性ないもん。去年の主催者つて、誰だっけ?あの、やたら綺麗な顔の男の子

「深沢先輩?」

「そりそり。あの子はしつかりしてたわよ。私に企画書を持ってきたもの。これこれこうこう企画で、こうこうことで協力して頂きた

いです、つて」

ズズツ、と茶を啜り、満足そうに鈴加は微笑んだ。千秋が小首を傾げる。

「協力つて？ 鈴加ちゃん、何したの？」

「興味本位で靈に近づこうとすると、靈を悪い方に刺激しちゃうのよ。肝試しなんて、その典型よ。まあ、めったにヒドイ状況にはならないものだけど、もしものことを考えて、私に依頼が来たの。もしもの時は徐靈をお願いします、つてね」

「だから、去年、鈴加もいたのか。何しに來たんだよ、つて思つてた」

「あんた、バカでしょ？ 何が哀しくて、中学生の肝試し大会に好んで付き合いますか！？」

金よ、金、と鈴加は親指と人差し指で丸を作つて見せた。

「とにかく、あんたはバカなんだから、何をやるにしても前任者からのアドバイスを貰うことね」

「そうだね。深沢先輩に電話してみたら？」

深沢先輩か。

人の良い彼のことだ。きっと相談すれば良い知恵を授けてくれるに違いない。

おおっ。これは、日射しが差してきたカンジー？

直久はすくっと立ち上がると、電話を掛けに居間へと駆け出した。

放課後、唐突に黄色い声が上がつた。久し振りに聞いた響きだつた。

「きやあああああああ。深沢先輩！」

「きやあ。こつち見た！」

「深沢せんぱーい！」

あと一週間で夏休みがスタートする。期末試験を負えた本日、直久の頼みを聞いて、深沢高明が中学校にまでやつてきてくれたのだ。2年生以上の女子で、彼のことを覚えていない者はなく、初めて彼を目にした1年生をも交えて、歓声を上げている。

高明は体育館の入り口で持参してきたバッシュに履き替えると、懐かしそうに中を見渡した。

すぐに直久の姿を見つけ、片手を上げた。

「直！」

「先輩、マジで来てくれたんですねー」

「お前が来いって言つたんだろ？」

「来いつて言つて、ちゃんと来てくれる先輩、ダイスキです！」

普段、数久にするように、ぎゅうっと両腕で高明に抱き付いて、直久は上機嫌に笑った。

「だ、抱き付くな」

「いいじやないですか。減るもんじやないんですから」「擦り減りそ？」「

「ひどつ！？」

高明が直久を己から引き剥がした時、タイミング良くバスケ部部長の木村史宏がやつて來た。

「相変わらず、すげーツスね。深沢先輩つて」

「何が？」

「女子がギヤーギヤー」

「きやあ、きやあ、だろ？」

「つるさこことには変わりない」

ははは、と高明は苦笑する。さっそく、けど、学生鞄から紙切れを取り出した。

3人は、練習している他の部員を横目に、体育館の隅に寄つた。

「これが去年、俺が書いた企画書」

「ほうほう。……すっげえー。何コレー？ 細かい」

「お前なあ。お前が無企画なんだろ？『やりたい』って言つてい

るだけじゃ、何も実現しないんだ。もつと具体的に、現実的に考えなきゃダメだな」「なきゃダメだな」

「例えば？」

「そうだな、と言しながら、高明は学生鞄からB5サイズのレポート用紙とペンを取りだした。

鞄を机代わり、ペンを滑らせる。

「日程は決めたのか？　去年と同じで、夏期大会最終日の翌日にするのか？」

「そのつもり……」

「参加人数は？　女子も参加するのか？」

「するんじゃねーの？　去年も参加してたし……」

「聞いて来い、すぐに」

高明が滑らせたペンは、レポート用紙に日時を書き込み、その下に男子バスケ部員の数を書き込んでいく。

彼に命じられ、木村が女子部の方に駆けていった。

バスケ部の男子と女子は体育館を時間で区切り、交代で使う。男子が体育館を使っている時間、女子は校庭で走り込みをしているはずだ。

「それで、どこで肝試しをするんだ？　去年は俺たちの別宅でやつただろ？」

「そうなのだ。この先輩の家は、ものすごく金持ちで、自宅の他にも家があつたりする。

「これも、彼が『王子』などと呼ばれる所以だ。

「あー、考えてなかつた！？」

「本当に行き当たりバッタリだな。どうにかなると思つていたのか

「なると思つてた」

「……」

高明はため息をつく。そして、黙つて、『場所：深沢宅』とレポート用紙に書き込んだ。

それを戻ってきた木村が覗き込んで、驚いたように声を上げる。

「貸してくれるんスか？」

「うわっ。先輩、好き過ぎつー。」

「だから、抱き付くな。直！」

直久の躰を押しやつて、高明は再びため息を付いた。

「どうせ、今、使つてい家だから良いよ。 父さんが愛人のために買つた家なんだ。もうその人とは別れたから、必要なくなつたんだつてさ」

「あ、愛人ツスカ」

「なかなかベビーな」

「好きに使つて良いつて言われて貰つた物だから、好きに使つてい

いぜ」

「すつげ！」

「ありえねえー」

家一件丸ごとをプレゼントするような親子関係がワカララン。

だけど、無事、肝試し会場ゲットだぜ！

直久が大喜びしている横で、それで？と高明は木村に振り返つた。

「女子は何だつて？」

「参加するつて言つてました」

「そつか」

高明のペンが滑つた。女子部員の人数がレポート用紙に書き込まれる。こんな感じに次々と、高明によつて、企画書が書き上がりつた。

「ああ。先輩つて、なんて出来る人なんだ。

「これは是非、嫁に欲しい！ 一家に一台、使える男を、つてカンジだよなあ～。

「……などと直久が、おバカなことを真剣に考えているうちに、あれよこれよと企画書は完成してしまつた。

問題は、ゆづるだった。

「私は無理だからね」

スッパリと断つてくれたのは、鈴加だ。軽く片手を振り、一いちらを振り返ろうともしてくれなかつた。

企画書を生徒会に提出し、一応の許可が出たが、条件も一つ出されてしまつた。それは、つまり、もしもの場合に備え、靈に詳しい人にも参加して貰うことだ。

要するに、去年の鈴加の役目である。

ところが、鈴加は、今年の夏は千秋の世界に行くから、中学生の肝試し大会には付き合つてやれないと言う。貴樹も当然、鈴加の方に付き合つことが決定しているので、ダメ。

すると、頼める相手は数久しかいない。

そうだと思い、生徒会に掛け合えば、まだ中学生の数久では不安だと言われる。

数久と、あともう一人いれば許可できる、と。

もう一人。 暗に、ゆづるを差して言われた言葉だった。

直久は目前に連なる石階段を見上げて、ため息を漏らした。すぐ隣で木村もため息をついたが、彼と自分のため息では意味合いが異なる。

彼のため息は、この階段を登るのかと、ウンザリした気持ちの表れだ。だが、この程度の石階段ならば、直久の家の神社とそう変わらない。

直久にとつては慣れたものだ。直久の憂鬱は、ゆづると会わねばならないという気持ちから来る。

ゆづるとは4月の初め頃から、3ヶ月近く、口を利いていない。

田すら合わせていないのだ。

ゆづるが直久を避けている。それもある。だが、直久の方もゆづるを避けていた。

九堂ゆづる。直久や数久の従姉である。大伴家の本家筋にあたる九堂家の御曹司として育てられているが、ゆづるは女だ。

直久がそのことを知ったのは、たった3ヶ月前。それまでずっとゆづるは自分と同じ男だと思っていた。疑いもしなかつた。なぜなら、ゆづるは物心付いた頃から、ずっと男の格好をしていたし、男として生きていたからだ。

おそらく、学校の友人たち誰一人として、ゆづるが女だと気付いている者はいないだろう。

直久と木村は石階段を登つた。

石階段を上がり切ると、やはり石で造られた鳥居が見えてくる。登つてくる者をさらに高い位置から見下ろすその足下には、『朝霧神社』と彫られていた。

その下をくぐると、やたら立派な社が姿を現してくれる。

やはり、そこにも狛犬の姿はない。直久の家の神社には、代わりに狼の石像が置かれているが、この神社にはそれさえもなかつた。神社の後ろに古い造りの家があつて、社の両脇の部屋とは長い廊下で繋がっている。

この古い日本邸こそがゆづるの暮らす家で、歴代の九堂家当主が生まれ育ち、受け継いできた家だ。

玄関前まで来ると、直久は息を呑んだ。木村に振り返る。

「いいか。先手必勝だぞ。ゆづるの姿を見つけたら、即、土下座だ。余計な事は言わずに、手短に、頼み込んで、頼み込んで、頼み倒す！」

「……わかった」

おそらく、直久一人で頼みに行つても、ゆづるは引き受けてくれないだろ？

そう思い、木村を伴つてきたのだ。

ゆづるは直久のことを嫌つてゐる。どうしてだか、分からぬ。幼い頃から、そなのだ。

直久だって、ゆづるが嫌い。ずっと、そう思つてきた。だけど、どうしてだらうか？

この頃は、ゆづるのことが気になつて仕方がない。会いたくない。だけど、今この瞬間、彼女がどこで何をしているのか、知りたい。

彼女が見つめているもの、彼女が考へていること、何でも良い、知りたいのだ。

だけど、怖い。会いたくない。 知りたくない。
自分の気持ちが分からぬ。どう、ゆづるに接して良いのか、分からぬ。

ゆづるは九堂家の跡取りで、男だ。そう思おうとしている。
だけど、事実、ゆづるは女で、女だと知つてからは、女にしか見なかつた。

九堂家の当主は男子と定められていた。

本来ならば、祖父の後を継ぐのは、ゆづるの父なのだが、彼は破门されてしまつた身だ。

ゆづるしかいないのだ。 でも、だからつて！

だいたい、男子しか当主になれないつていう決まり事からして時代遅れだし、どうしても男子が必要なら、養子とか婿養子とか、他に方法があるんじやないの？

ゆづるが犠牲にならなくとも良い方法が。

だつて、無理だろ？

今は良いかもしねない。だけど、いつかは無理が来る。本当は女なのに、男の振りをし続けて生きるなんて。

もしも、自分が女として生きろと言われたと仮定して、想像してみる。

あり得ない！

直久はすぐに頭を左右に振った。自分が女装している姿を思い浮かべて、鳥肌が立つ。

その格好で一生を送れだなんて言われたら、泣く！

泣いて気持ちが済むわけもないけれど、自分の生まれを恨んで、憎んで、ひたすら喚き散らすと思つ。

ゆずるもそうなのだろうか？

ゆづるは、泣いた？ ゆづるは己の運命を憎んでいる？

直久は玄関の扉を睨み付け、それが開くのを無言で待つた。

4・何かあんのかよ？

午後7時と言えども、8月である。西の空がうつすらと明るい。つい先程まで、隣にいる木村の顔がハッキリと確認できた。夏は好きだ。昼間の時間が長いってことは、その分、遊ぶ時間も長くなるから。

直久は集まってきたメンバーを見渡し、その顔を確認した。さすがに、そろそろ灯りが欲しくなってきたか。

用意してあつた懐中電灯を点ける。それを見て、木村も眉つ。「暗くなってきたな。そろそろ時間だ」

皆も習い、次々に光の花が咲いていく。まるで、そこだけが昼間に戻ったようだ。

直久は眉を顰め、辺りを見渡した。

「まだ、数とゆずるが来ていない。あいつらが来ないと始められない」

「そうだな。……けど、本当に来るのか？」

数久はともかく、ゆずるは？と木村が言つ。直久だって、それは不安なのである。

あれから、もう一ヶ月が過ぎ去つている。

だが、確かに一ヶ月前、木村と一人で肝試しの企画書を持参し、頼み込み、なんとか良い返事を貰つたのだ。来てくれるハズ。

「来なかつたら、中止だからね」

不意に声がして、振り向けば、森岡いすみが腰に手を当てて、仁王立ちをしている。

「げつ。森岡。何しに来たんだよ？」

「もちろん、監視」

私は生徒会長だから、と目を光らせる。そのまま隣には、腰巾着副会長と書記がさも偉そうにふんぞり返つている。

直久はウンザリして、彼女たちから目を逸らした。

「直！」

呼ばれて振り返ると、今度は高明だった。直久の顔が綻ぶ。

「せんぱーい。来てくれたんですねー」

「こつちも大会が終わって、暇だつたからな」

高明は高校でもバスケ部に入り、一年生ながらレギュラーに選ばれ、活躍しているらしい。

どこに行つても相変わらずのパーフェクト人間ぶりに、ホント辟易してしまう。

ふと、高明の隣の人物に気が付いて、直久は目を大きくする。

「わっ。いけべー先輩じゃないですか！？」

「べーと伸ばすな、べーっと」

苦々しく笑つた彼女の声と、女の子たちの声が被さる。

「きやあ、レイジ先輩！」

「レイジ先輩、来ててくれたんですか！？」

「深沢先輩が来るんなら、レイジ先輩も来てくださると、信じていました！」

「さすが、レイジ先輩！」

「何がさすがなんだかワカラんけど。みんな、レイジじゃなくて、レイシだから。……つたく、ここには私の名前を正確に呼べるヤツはいないのかよっ」

更に苦笑を浮かべるこの人物は、去年の女子部の部長で、池部怜司である。

高明とは小学校に上がる前からの仲で、中学はもちろん、高校も同じところに通つているような仲である。いわゆる、幼馴染み& a m p;・腐れ縁というヤツだ。

「いけべー先輩。髪、伸びましたね」

「切つてないだけ。うちの高校のバスケ部は自由だから。ここみたいに髪の長さを規制されてないからね」

怜司は肩を越す程度まで伸びた己の髪を撫でながら、後輩の女の

子達を指し示した。

みんな、見事なほどショートカットだ。強制されているわけではないが、ある程度長くなると、激しい運動には長い髪は邪魔だろうと、顧問が耳元で囁くので、半ば強制されているような気分で、皆、髪を切つてしまうのだ。

高明が怜司を親指で差して、笑った。

「こいつ、一年だからって試合に出させて貰えなかつたらしいんだ。練習でも、一年だからって、基礎ばかりださ。だから、その憂さ晴らしについて、誘つたんだ。参加しても良いだろ？」

「もちろんッスよ。いけべー先輩なら、女子も大喜びですし」

「でも、一年だからって……。いけべー先輩はそこらの男子よか上手いのに？」

眉を寄せた直久に、怜司は肩を竦めて嗤つた。

「女はそういうのに、やたらひつるさいんだよ。先輩の言葉には従え、そして、敬えつてね。ウザイ。マジ、ウザイ！女子部の方で練習させてくれないから、男子部に紛れてやっていれば、生意氣だとか言うし。あげく、男好きだの、タラシだの言うんだよ。信じられる？」

「女つて、いろいろ大変そうッスねー」

「いつそう、いけべー先輩、男なら良かつたんじやん？」

「私もそう思う」

そういうつて苦笑し、怜司は背後を振り返る。そこには古めかしい家が建つていた。深沢家の別宅である。

まるで使用していないといふのは事実らしく、荒れた庭が広がり、そこから伸びた薦が壁という壁を覆つていた。

庭の隅に小さな池がある。周りを石に囲まれたそれは、一般家庭にある風呂ほどの大きさで、

つまり、人一人が入れる程度。

深さは分からぬ。覗き込むと、黒く淀んだ水に己の顔が映るばかりだ。

薦は二階の窓まで伸びている。窓にはカーテンが掛けられてい

る。薄汚れた白いカーテンで、ビリビリに破れている。

かなり大きな家だ。中も広そうで、部屋数も多そうである。

「肝試しには持つてこいの家だな」

「ちなみに、電気も水道も通つてない。改装して愛人を住まわせようとしたらしいんだけど、その前に、その愛人と別れちゃったんだと」

「高明のお父さんって、ホント、お盛んだよなー」

怜司の言葉に高明は、直久と木村に振り返り、眉をわずかに吊り上げる。

「破壊するつもりで使ってくれ

「ありがとうございます！」

その時だった。不意に気配を感じて、直久は辺りを見渡した。

酒の匂い？

近ごろ分かつたことだが、この匂いは先見だ。

先見は九堂家当主とその次代が使役する妖狼で、先見神社の主である。先見神社とは、直久の家が管理している神社のことで、その境内で時々この気配を感じるのだ。

「直ちゃん。お待たせ」

声が響き、振り返ると、数久だった。隣にゆづるがいる。来てくれたのか。

直久はホッと胸を撫で下ろした。

しかし、まあ……。この酒の匂いから察するに、先見を連れてきたらしいけど、大丈夫なのか？ 先見つて、酒ばっか飲んでいるような奴だろ？

内心、不安を感じながら、直久は弟に向かつて手を振った。

「遅いよー、数うー」

「ゴメン」

数久はすぐに高明と怜司の存在に気付き、軽く頭を下げた。

「お久し振りです。深沢先輩、池部先輩」

「大伴弟、あんただけだよ、私の名前を正確に言えるヤツは

「久し振り。九堂も」

「お久し振りです」

高明に微笑みかけられて、ゆずるはぺっこと頭を下げた。そして、家に振り返る。

「深沢先輩、この家つて……」

「ん？」

「いえ」

「失礼ですが、この家を購入する際、何か特別な説明はなかつたですか？」

「特別な？いや、買ったのは父さんだから、よく知らないけど。……そう言えば、土地の広さにしては安値だったとか言つていたつけ」

「そうですか」

数久はゆづると目を交わすと、口元に拳を押し付けた。その思案中ポーズに、直久は不安になる。

「何かあんのかよ？」

「うーん。まあ。んーっと。でも、大丈夫だと思つよ。ね、ゆづる？」

「そうだな」

「本當かよっ！？」

思わずツッコミを入れて、ゆづるに振り返る。目が合つた。まさに数ヶ月ぶりに、だ。

だが、それも一瞬で、ゆづるの方から目を逸らされてしまった。ゆづるの奴、ちょっと見ないうちに瘦せたよな。

肌も白く、闇の中に溶け入ってしまいそうな程、頼り無げだ。ゆづるの様子を盗み見ていると、数久が尋ねてきて、ハッと我に返る。

「去年の肝試しもこの家でやつたの？」

「違う。別の家だった。……よね？ 先輩」

「ああ。別の家だ。あっちの家はもう駐車場にしちゃったからな。

「こしか空き家はないぞ」

「今更、中止にするわけにはいかないんだから、何とか頼むよ、数」

「うん。大丈夫だよ」

きつと、と疑わしい言葉を続けて、数久は一ツコリ微笑んだ。この微笑みを信じて良いものか、頭が痛いところだが、信じるしかない。

直久は持参してきた紙袋の中から、ミニサイズのスピーカを取りだし、口元に当てた。

「バスケ部集合！肝試し、始めるよん」

ルールは単純。男女一組で家のなかを回るのだ。

高明が貸してくれた間取り図を拡大コピーした物を、木村が扉に貼り付けた。

「いいか。よく聞け。こいついう順路で回れば、次のペアと鉢合わせすることなく、すべての部屋を回る事ができる」

木村の指が図上を滑っていく。すると、それを見た一人が声を上げた。

「ちょっと待て、そこ壁じゃねーの？」

確かにその通り、木村の指は「ことじ」とく壁を無視して滑っている。

彼は笑った。

「壁は前もってぶち抜いてある」

「マジで！？」

「すっげー！マジで、家、破壊するつもりじゃん」

木村の指は階段を上がり、一階へと移動していく。

やはり、一階の壁も無視しまくり、すべての部屋を通り抜けると、一番隅の部屋の窓にたどり着く。

「この窓に椅子を付けて置いたから、そこから庭に降りてくれ。ん

で、庭を回つて、玄関の方に戻ってきて、「ゴールだ」
「だけど、ただ回るだけじゃ、つまんないだろ？ 家のどこかに人
数分のビー玉を隠してある。それを探して、一人一つ持つて帰
つて来てくれ」

これな、と直久は透明に輝くビー玉を摘み上げ、みんなに見せた。
「つまり、ペアで二つな。ビー玉を持ち帰らなかつたペアはもう一
回りして貰うからな」

「それって、先に回つた方が有利じゃねーの？」

「おう。だから、渾身の力を込めてクジを引いてくれ」

「渾身つて……」

ドツと湧く笑いの中、直久自身も笑いながら、くじ引きの箱を紙
袋から取り出した。

5・どうなつとくじゅー

行つてきます、と最初のペアがスタートしてから、40分が経っている。そろそろ戻つてもいい頃だ。

直久は庭を見渡した。家は敷地の北寄りに建つていて、庭は南に広く、スタート地点となつていて、門も南側にある。

池は門を入つてすぐ西側にあり、そこから庭を北に回り、見上げたところに梯子を立て掛けた。北西の隅の部屋である。門から、その部屋も梯子も確認することはできないが、人影を求めて、直久はそちらの方をジッと見つめた。

「戻つて来ないな」

響きに焦りが感じられた。ハッと振り返ると、木村も直久と同じ方角を見据えていた。直久は頷く。

遅い。

いくら広い家だからといって、日本なのだ。たかが知れている。ビー玉が見つからないのか？

いくつか分かり難いところに隠した覚えがあるが、ほとんどの物はすぐ目に付くようなところに置いたはずだ。それなら、何をそんなに手間取つているのだろう？

すでに8組みがスタートしている。つまり、16人が家の内でウロウロしていることになる。そんな大勢でウロウロしたつて、怖くも何ともないだろう。

9組み目をスタートさせるかどうかで、直久と木村は視線を交わす。

「どうかで溜まつていてるんだろ？」

苦笑したのは高明だった。去年こそなかつたことだが、予期できる範囲の事だ。

組んだ相手に不満を持ち、一人きりの空氣に耐えきれない、次

のペアがやつて来るまで待つていいのだ。きっと、団子のまつこ団子

まって、集団で、ゴールにやつてくるに違いない。

「ゾロゾロ歩いたつて、怖くないだろ?」

「肝試しの意味ないじゃん」

「丁度良い。次、私と高明の番でしょ? 散らじてきてあげるよ」

「散らすつて、蜘蛛の子じゃないツスよ?」

両手を腰に、一コ一コしている怜司に向かって、木村は眉を寄せて笑った。

「でも、そうしてくれると助かります。このままだと後ろ詰まっちゃいますから」

「了解、了解。 さっそくだけど、スタートしてもいい?」

怜司は高明の袖を引っ張りながら、玄関の方を親指で指示した。

行事好き、お祭り好きな性分なのだろう。表情がウズウズと、にやけたものになっている。

木村は高明に懐中電灯を手渡すと、深々と頭を下げた。

「深沢先輩、宜しくお願ひします」

「分かつた」

「ちょ、ちょっと、なんでそこで高明にお願いするんだ? 散らすのは私じゃんか?」

「怜司、行くぞ」

「なつ」

納得行かない、と大声を上げて、怜司が高明を追うよつとして、二人はスタートしていった。

やれやれ、である。

あれで、あの二人は付き合つていないと呟つのだから、驚きだ。

お互いの事を分かり合つていて、端から見ると、お似合いなのに……。

本人たち曰く、お互いの事を知りすぎてしまつていいことで、却つて、ダメなんだそうだ。

しかも、怜司曰く、

「高明の顔と、高明の家の財力は好きだけど、あの顔の隣に並んだ自分の顔を想像して、嫌気が差す。だから、高明とはイイカンジの距離関係で、高明の家の財力を存分に利用できるような関係であります。続けたい」

「……だそうだ。

タカリ、タカラレ関係？

二人の背中を見送り、直久は息を付いた。

ツンと、酒の匂いが鼻を刺す。眉間に皺を寄せて、直久はゆするの方に振り向いた。

「先見を連れてきたら？」

物を言わないゆするの代わりに、数久が微笑んだ。

「よく分かったね」

「酒の匂いがする」

「酒？」

「するだろ？　ふんふんするぜ？」

「そうか？」

答えたのは木村で、彼は顔を顰め、鼻を鳴らした。数久は小首を傾げる。

「確かに僕も匂うけれど、この匂いはある程度力を持つている者にしか感じられない匂いなんだ。　やつぱり、直ちゃんって、僕と双子だつたんだねえ」

「何を今更……。え？　つまり？　それって、俺にもちょっとは力があるってことか？」

「あつたつて不思議じゃないと思つよ。むしろ、まつたくないという方が不思議なんだから」

「そつか」

直久は己の手の平を見つめた。

もしかしたら、自分にも数久やゆするのよつた力があるのかもしない。

特に、欲しいとは思わない。だけど、あれば便利だと思う。

それに、親族たちと同じ力を持つていれば、本家に行つた時、嫌な思いをせずに済む。

あの疎外感がなくなる。

直久は拳を握り締めた。

「そうそう。本家と言えば」

「へ？」

思い出したかのように突然、本家と口を開いた数久に、直久は目を大きく開く。

「お、お前、今、俺の心読んだだろ？」

「ごめん、つい」

「ついだあ～？ いくら數だつて、許せる」とと許せないことがあるぞ」

「「めんね。……だあつて、直ちゃんの考えていることつて、僕には筒抜けで聞こえてきちゃうんだもん。聞こうだなんて思つていなーし、心を読もうだなんて……」

「筒抜け！？」

「つ、つ、筒抜けだつたのか！？」

15年間、一緒に生きてきて初めて知つた事実だ。

それが本当なら、俺が今まであんなことやこんなことを妄想して考えていたこと全部、数は知つてゐるつてことだ。

直久は額を抑えた。

「數う」

「あ。それでねー。お祖父様のことなんだけど」

直久がウルウルした目で見つめていることなど、お構い無しの数久だ。あくまで自分の話したい話題を押し付けるつもりらしい。

「二〇二二〇」と笑う数がやたらめつたら眩しく、そして、憎い。

これつて、憎さ余つて、可愛さ100倍つてヤツ？

逆か!? 可愛さ余つて、憎さ100倍だつーの。

直久は諦めるよつに、頭を左右に振つた。それで?と話の先を促

す。

「実はね、具合がよくないらしいんだ。ホント言ひつと、今年の初め頃からなんだけど。最近はよく寝込むらしいんだ」

「じじいが？」

「うん。やうだよね、ゆずる？」

「……」

同意を求めて、数久はゆずるに振り返る。ゆずるは無言で頷いた。

「だからね、直ちゃん。時々は本家に顔を出して欲しいんだ。お祖父様の一番のお氣に入りは直ちゃんなんだから」「だけど……」

直久はゆずるの顔を盗み見る。

本家にはゆずるがいる。行けば、必ず会いつことになる。会いたくない。だけど……。

「直」

呼ばれて、振り返る。木村が自分の腕時計を指し示していた。

「そろそろ次のペアをスタートさせる時間なんだけど?」

「一向に誰も戻つてこないなあ~」

「どうなつとんじゃー」

困った、困った、と木村が頭を搔く。すると、今までどこに居たのか森岡が口を開いた。

「次、私の番でしょ？」

ちやっかり肝試しに参加している生徒会長である。監視しに来たとか言つていたが、単に参加したかつただけなのかもしれない。木村は彼女に振り返り、頷いた。

「お前と俺だ。お前が10番なんか引くから……」

不服そうにパートナーを見やる木村に、森岡も不満そうである。

このペア 10組目で丁度半分となる。

直久は最後の組みに、木村は真ん中の組みにと、最初から決められていた。木村が森岡と組むことになったのは、木村の運の悪さと、

森岡が10番と書かれたクジを引いてしまったからだ。直久は笑い、片手を振った。

「行つて来　い。んで、中にいる奴らをとつと追い出してくれ」

「おー」

木村も軽く腕を上げて、笑った。

更に20分が経った。

さすがにオカシイと言わざるを得ない。未だに誰一人として戻つてこないのである。

順番待ちの面々も不安げな顔をしている。

「俺、中の様子、見に行つてくる」

ゆづるだった。何か感じるものがあるのか、胸の前に拳を押し付けている。

「違和感が……」

「違和感?」

「……」

直久の問いに答えず、ゆづるは懐中電灯を手に門を押し開いた。

慌てて、直久も追う。

「待て。俺も行く」

「僕も」

数久も追つてくる。

門を通り抜けた時だった。ふつ、と光が顔を掠めた。直久は振り返る。

まるで、星が、夜空から降ってきたかのようだった。

「ほたる」

誰かが呟いた。

言われて見ると、それは螢だった。どこに潜んでいたのか、数十

匹という螢が一斉に光を放つたのである。

「螢？」

「どうして、こんなところに?」

時期も時期だった。早くて5月末、大抵7月の半ばあたりが、螢が現れる時期とされている。

今はもう8月の終わりだ。

そして、螢は綺麗な水を好む。この住宅街にそのようなものがあるはずがなかった。

なんで、螢が?

「死者の魂」

「え?」

「……」

呟くだけ呟いて、聞き返しても答えてくれないゆずるこ、さすがの直久も苛立ち、舌打ちをした。

順番待ちをしているバスケット部員に振り返り、片手を振る。

「中の様子を見てくるから、お前らはここで待つてろよ」

残りは十数名ばかりだ。彼らは螢に見入りながらも、頷く。

それを確認してから、直久はゆずると数歩を追って、家の中へと足を踏み入れた。

6・あつぶねえーな しつかり歩けよ

玄関の扉を閉めたとたんの出来事だった。ぱたぱたぱた、と足音が響いた。

双子とゆずるは顔を見合わせる。

「誰だ？」

軽い音だった。おそらく、子どものものだろう。

耳を澄ませるが、音はそれっきりだった。空耳だったのかも知れない。

靴は脱がずに玄関を上がる。家の中は見るも無惨な有り様だ。壁はボロボロに剥がれ、天井には所々穴があいている。

数久は靴箱の中を覗いた。中は空だった。

それでもそこから何かを感じたようで、口元に拳を押し付ける。ゆするも靴箱に手を置いて、瞼を閉ざした。

「以前ここに住んでいたのは、父親と母親、それから、男の子だったみたい」

「男の子は病気持ちだな」

「何の病気だろ？」「…

「さあな」

靴箱を見ただけで、そんなことまで分かるから、驚きだ。

直久も真似して靴箱を撫でてみるが、ザラザラしただけで、何も分からぬ。手が埃で白く汚れた。

足を進めると、廊下がギシギシと悲鳴を上げる。

その音が申し訳ないような、怖いような気がして、そつとそつと足を進めた。辺りは恐ろしく静かで、自分たちの足音と息遣いしか聞こえない。

数久が一番手前にある部屋の扉を開いた。肝試しの順路通りに進むつもりらしい。

ギィー、と耳に痛い音が鳴り響く。どうやら、この部屋は居間だったようだ。

大きく裂けたソファー。埃にまみれ、灰色に見えるが、おそらく元々はクリーム色だったのだろう。

クッションの下になつてているところが、元の色を保持していた。中央で真つ二つに割れているテーブル。ブラウン管テレビは画面が割れ、中の空洞が見えている。

ゆずるの躰がグラリと揺れる。フローリングの床に空いた穴に足を取られたようだ。

直久は咄嗟にゆずるの腕を引いて、その躰を自分の躰に寄せる。抱き留めた恰好だ。

「あつぶねえーな。しつかり歩けよ」

サラシでも巻いているのか、本来柔らかく膨らんでいるはずの胸はガチガチに固い。

これじゃあ、女だつて分かるわけがないよな。
しかし、腕、激細つ！

前から細い細いと思つてはいたけれど、ホント細いよな。……つてゆーか、前より更に瘦せてないか？

「……おいつ

「んあ？」

「離せ」

「へ？」

「いい加減に離せって言つてはいるんだ！」

バシン、とゆずるが直久の腕を打ち払う。

そうされてから、ようやく直久はゆずるを抱き締めたままでいたことに気が付いた。

「わりいー。なんか、お前、じつ、ギュウウとするのに丁度良いサイズでさー」

「はあー？」

「でも、もうちょっと肉が付いていた方が抱き心地良いんだけど？」

「……」

バキッ。

「痛つ」

激痛が走った額を押さえる。何だか焦げ臭い。

チリチリになつた前髪が、触れただけでボロボロと落ちてくる。

「なんか、前髪焦げてないか？！」

「直ちゃんがバカだからだよ」

ほら、と言つて数久は直久の額に手を置く。手のひらから放たれた青く温かい光が額の痛みを治めてくれる。

どうやら前髪も元通りに戻つたようだ。

「てか、今、何が起こつたわけ？ 僕、どうなつてたわけ？」

「ゆずるが火刈りの炎を借りて、直ちゃんにテコピンしたんだよ

「火刈り？」

先見と同じく、ゆずるの式神である。

火刈りも連れて来ていたのか。つーことは、力の調子は良んだな。

ゆずるの話によると、扱いづらい火刈りは調子の良い時にしか喚ぶことができないのだという。ゆずるの力は不安定なもので、月の満ち欠けによつて、フルパワーになつたり全く失つたりするらしい。実はこれ、うちの家系でも女のみに見られる力の変化で、これこそゆずるが女である証だったわけだ。

そうと知つていれば俺だつて、もつと早く女だつて気付いたのにやー。

木村が前もつてぶち抜いたといつ壁を抜けて、隣の部屋に移動する。

「こちらはどういう部屋なんだろうか？ あまりの家具の散乱ように判断しがたい。

誰からの私室だつたのか、客間だつたのか。

「あ。あれ？ 直久」

「圭介ちゃん。まだこんな所にいたのかよ」

直久は呆れ顔で相手を見やる。

どうやら、自分たちよりも5分早くスタートしたペアと合流してしまつたらしい。

「えーっと、そつちは古川だっけ？」

同じバスケ部でも、女子部員の顔と名前はサッパリ一致していない直久だ。

立野圭介がペアを組んでいる少女を指差し、首を傾げる。少女は苦笑して頷いた。

「ビー玉がなかなか見つかなくて」

「ビー玉？ このへんは簡単に見つかるようなところに置いたから、もう誰かが見つけて持つていったんじやん？」

「そつか」

「あ。待てよ。確か……」

直久は思いだして部屋の隅の方に目を移した。古い壺がある。陶器の壺で、大きさは抱えるほど。

「の中に一つ隠した覚えが」

「マジで？」

圭介は顔を輝かせて、壺に歩み寄った。ずつしりと重い壺を傾ける。

カラーン。

確かに何かが中に入っているようだ。軽い音が辺りに響く。深さのある壺だ。中を覗き込んでもビー玉の姿は確認できない。

圭介は腕を壺の中に突っ込んだ。腕は闇に吸い込まれるように、肩まで壺の中に入ってしまう。

「あつた」

圭介が笑顔を浮かべた。手を壺から出すと、眞の前で広げて見せた。

透明のビー玉だった。懐中電灯の光の加減で所々、赤や黄色、青にも見えた。

古川も微笑みながら、圭介に駆け寄る。

「あと一つ見つければいいのね」

見せて、と圭介に手のひらを差し出す。

圭介はその手にビー玉を置こうとした。が、ビー玉は圭介の手のひらから離れなかつた。

右手で掴んだビー玉。左手で摘み、引き剥がそうとするが、離れない。なんだか手のひらがムズムズするようである。

懐中電灯を当てて見やれば、ビー玉から虫の足のようなものが見えた。

「直久。これ、変だぞ」

「ん？」

「変だ。絶対、変だ」

変だと繰り返す圭介の声が次第に狂気じみたものになつてくる。

「変だ。変だ。変だ。変だ。変だ。変だ。直久 つ！」

助けてくれ、と叫ぶ。

何事かと直久たちは圭介に駆け寄つた。見ると、ビー玉が割れ、その中から出てきた虫が圭介の手のひらから体内に潜り込もうとしているではないか。

虫 「ガネムシだろ？ もっと大きいように見える。

「虫だ」

「虫？」

虫なんぞ、暗闇で光つている姿しか知らない。

これが虫？

「痛つ。な、なんとかしてくれつ！」

見る見るうちに、虫は圭介の手のひらの中に潜り込み、肉を喰らい、手首へと移動していく。

手首から腕へ、腕から肩へ。虫が移動している様子は、異様に盛り上がつた固まりが皮膚の下を這つていく様子を見れば分かる。肩から首へ。首筋が虫の大きさに盛り上がり、その盛り上がりは更に上へ上へと這つていいく。

「きやああああああああああああああああ」
顔に。そして。

ボロリ、と何かが落ちた。それはクシャリと床に落ちて、潰れた。
古川がギョッとして、それを懐中電灯を照らす。それは、圭介の
右目だった。

「ひつ」

「圭介！」

圭介の顔に明かりを照らす。右目がない。あるべき場所には穴が
空き、蛍が顔を覗かせていた。

次の瞬間。ブーン、と蛍が羽ばたいた。古川の頬に止まる。

「いやつ」

彼女が頭を左右に振ると、再び、ブーンと羽音をさせる。今度は
彼女の左耳に止まつた。

「やつ。取つて。早く！」

助けて、と古川が叫んだ時だった。蛍は再び羽ばたき、耳の中へ
と潜つていった。

耳の中でカザゴソ音がする。それは恐怖を感じるほどに大きな音。

ブツ。

何がが破ける音が響いた。とたんに目の前が暗くなる。

「古川？」

直久は身動きが取れなかつた。ただ、ジッと古川を見守つていた。
彼女の目から、鼻から、耳から、血が流れ出る。蛍は彼女の右耳
から出てきて、頬伝い、顎を伝い、首を伝い、襟の下へと姿を消し
た。

ぐらり、と彼女の軀が傾く。

身動きが取れなかつた。直久が指一本動かせないでいるつむぎ、
彼女の軀は床に倒れた。

「直ちゃん！」

数久に呼ばれて我に返る。すぐ目の前を蚩が掠め飛んだといひだつた。

蚩は古川の腹から背へと穴を空け、再び圭介の頬に止まつた。

「止めるー！」

開かれた口の中に潜り込む。

「うぐっ」

「圭介！」

助けに駆け寄るつとしだが、それよりも早く、蚩は圭介の後頭部から飛び出できた。

直久は唾を飲み込む。圭介の躯が床に倒れていぐのを見守つた。

「直。数。ここは逃げるぞ」

「うん。直ちゃん、早く」

「でも……」

数久に腕を引かれながら、直久は圭介と古川に振り返る。

まさか、そんな。し、し、しん、死んじやいないだろうな。

「早く！」

「だけどっ」

「大丈夫だから、早く！」

どこをどう見れば大丈夫だと思えるのか、まったく分からぬ。だけど、それでも、今は数久の言葉を信じたい。

直久は一人から目を逸らし、手を引かれるままに、次の部屋へと駆けた。

7・ああ。会わなかつたぞ

やはり壁に空けられた穴から、次の部屋へと移動する。ゆづるが何かに蹴躓いて、よろけた。つかさず、直久はゆづるの腕を掴んだ。

「ホント、お前は」

危なっかしいヤツだ。

ゆづるは不機嫌そうに直久の手を振り払う。そして、自分が何に躓いたのか確認しようと、足下に懐中電灯を当てる。

「なつ」

ゆづるが息を呑む。どうしたのかと双子もそちらを見やつた。頭だつた。頭部だけが「ゴロン」と転がっている。

「藤吉?」

顔に見覚えがある。バスケ部員だ。

「そんな、まさか……」

「な、直ちゃん、こっちに香坂さんが」

「何だつて?」

藤吉とペアを組んでいた香坂の頭が、やはり「ゴロン」と床に転がっていた。

ブーン、と羽音が聞こえた。ゆづるが舌打ちをする。双子の腕を引いた。

「行こう」

「だ、だけど」

「大丈夫だ!」

大丈夫だつて? 人間つて頭だけでも生きていられるものなのか?

普通、死ぬものだらう? どこが大丈夫なんだ、どこが!

「ぜんぜん大丈夫じゃないじゃんか!」

「うるさい。大丈夫なもんは大丈夫なんだ。だけど、ここにいたつて、どうすることもできない。だから、先に行くんだ」

「けど」

「お前は残りたければ残ればいい。そして、何もできずに、ここにらと同じ田にあえばいい」

「……」

確かに、俺には何もできない。何も分からないから。いつたい何が起きているのかさえ分からない。

「見て、光が」

数久が懐中電灯の明かりを手で遮り、目だけで闇の向こうを指し示す。

暗闇に小さな光が点々と見える。螢の光だ。

1匹、2匹の数ではない。何十匹という光がジッと3人の様子を窺っているようだ。

「行こう」

「……ああ」

ぞつとした。何とも言い難い恐れを感じて、直久は素直にゆするに従った。

いつもいつも同じものを眺めて暮らしていた。

窓枠の黒。空の灰色。

世界は、その一色だけだった。

みんな、何がそんなに面白くて笑っているの？
そちらの世界は、そんなに楽しいところなの？

生き続けることは、苦しい。

だけど、死んでみても苦しいのは変わらなかつたよ。
これなら、まだ生き続けている方がマシだったと思つたけれど、
もう一度と帰れない。

僕の前に壁がある。

君には見えないかも知れないので。

僕の前に壁がある。

ずっと、壁の向こう側に行つてみたかつたんだ。
きっと、壁の向こう側には色がある。

色鮮やかな世界があるんだと、信じていた。

今よりずっと楽しくて、今よりずっと幸せな、そんな生き方ができるはずだと思っていた。

だけど、何も、変わらない。

ここも、あそこも、変わらない。

何のために壁を破つたのか。

何のために死んだのか。

何もかもが、分からぬ。

それから、何人分かの頭部を見つけた。

頭だけがゴロゴロと床に転がっている。どれも見覚えのある顔ばかりだつた。

「いつたい何が」

直久は目の前に立ち塞がる階段を見上げた。順序通り行くのであれば、ここから先は一階の部屋を回ることになつていて。

行こう、とゆづるが言った。数久もそれに従う。

木村は？ 深沢先輩は大丈夫だろうか？

彼らの頭はまだ見つけていない。

きっと、大丈夫だ。

直久は一人の背を追って、階段を登った。

階段を登りきつてすぐに入影が目に入った。木村と森岡だ。生きている。直久はホッと息を付いた。

「おーい、木村あー」

「待て！」

二人に駆け寄ろうとしていた直久に、ゆづるの待つたが掛かった。訝しげに振り返ると、ゆづるは無言で森岡を指した。彼女の躰が震えている。顔は青ざめ、気分が悪そうである。

「うつ」

呻き声。とたん、口からダラダラと涎が垂れた。

「ぐはつ」

ボタボタボタ。

何が落ちてくる。黒い、親指ほどの大さの何かだ。それが幾つも幾つも落ちてくる。

ゆづるに腕を引かれ、直久は後退った。

森岡の口から吐き出されたモノは、床一面に広がり、それぞれが小さく光を放つた。

「蚩」

今度は木村が呻く。躰を『ぐ』の字に折り曲げて、目を白黒させている。

苦しげな様子に、思わず駆け寄らうとするが、腕はまだゆづるに掴まれている。それに、床は蚩でギッチリだ。

次の瞬間。木村の躰が『ぐ』なりに反り上がった。腹が異様なほど膨らんでいる。

腹を突き出すような格好をしたかと思った時、その腹が一段と膨れ上がった。

バヌツ。

鈍い音だった。音と共に、黒いモノが弾けた。

水風船つてあるだろ？ 水で膨らませた風船。あれに針を刺したら、中の水が飛び散るじゃん。一瞬で、もうすこい勢いでさー。

まさに、そんなカンジだった。

裂けた木村の腹から弾け飛んだのは、虫だった。四方八方に飛び散り、淡い光を放っている。蛍だ。

「木村 つ！」

木村の躰はいつたいどうなってしまったのか？ 森岡は無事なのか？

怖くて懐中電灯を当てる事もできない。

暗闇の中、一人の躰が転がっているのが、うつすらと分かる。

直久は再びゆずるに手を引かれ、その場を後にした。

とにかく、駆けた。蛍が襲つてくる前に、手近な部屋へと駆け込む。

「直？」

驚いた声に、直久の方こそ驚いて振り返る。高明と怜司だった。

二人は怪訝な表情を浮かべる。

「なんだ、もう直の番なのか？」

当初の予定では、直久が家に入るのはみんなが回り終わつた最後だと決めていた。

それで、もう直久の順番が来てしまつたのか、と高明は驚いたようだつた。

「誰かゴールしたか？ 私が脅して、追い出してやろうと思つたのに、誰にも会わないんだよね。つまらない」

「誰にも会わない？」

「ああ。会わなかつたぞ」

数久は高明の言葉に眉を寄せ、口元に拳を押し当てた。ゆするも

顔を顰めている。

「先輩。俺がスタートした時点では、まだ誰も「ゴールしていないんです。俺達がスタートしたのは、先輩たちがスタートしてから20分以上経つてからだから、30人近くが家の中にいたことになるんです」

「30人？」

「この家にか？」

それでもまったく誰にも会わないだなんて、おかしい。よほどのタイミングが奇跡的に重なったとしか思えない。現に、直久たちは家に入つてすぐ、一つ前のペアと会つている。

数久がハッと顔を上げた。

「深沢先輩、何か奇妙なことはありませんでしたか？ 不思議だなあ、と思つようなこと」

「奇妙なこと？」

「奇妙だと言えれば、私たち、さつきから同じ部屋を何度も何度も回つているように思つんだ」

「だから、それは同じような部屋なんだよ」

「違うつて。同じ部屋だよ。だって、同じ物が置いてあるし。ホラ、あの絵もさつきの部屋と同じじゃんか」

「同じ絵が飾られていただけだろ？」

「絵だけじゃない！」

高明と怜司の言い争いを聞いて、数久は辺りを見渡す。

「同じところを回つているのかもしれません」

「え？」

「先輩方、もしかしたら、同じ場所をぐるぐる回つているのかもしれません」

「たかだか家を一回りするだけに、20分以上も掛かるはずがない

つてことですよ。20分もあれば、とっくにゴールしても良いはず。ビー玉に手間取つたとしても30分もあれば」

「確かに。さつきから、部屋がいくつもいくつも連なつていてるんだ。

この家は普通の家よりも広いと言つても、ここまで広かつた覚えはないな」

「幻影か」

「結界が張られている」

ゆずると数久は天井を見上げた。つられて直久も見上げるが、埃の固まりがぶら下がっているのが見えただけだ。

「やっぱりね。すべて幻だつたんだ」

「そうじゃないかと思つてはいたけどな。幻で良かつた」

「うん」

数久が薄く微笑む。何か良かつたことがあつたらしい。

直久は、何がどうなつているのかサッパリだと、頬を膨らませ、二人を見んだ。

「説明してくれ。どうなつてているんだ？ 何が良かつたんだか、ゼンゼン分からないぞ」

「んーっと、つまりね。この家に彷徨つている靈が僕たちに悪さをしていたんだ」

「悪さ？ ……靈つて、靈がいるのかよつ！」

「うん」

あつさり肯定してくれた数久に、直久は脱力する。

そりやあ、數たちは靈だの惡魔だの、何だのつて、人外なイキモノとの遭遇は日常茶飯事かもしないけどさ。こちどら、一般人なわけさ。もう少しそこらへんを考慮して話して欲しい。

「靈つて、悪い靈？ ……悪さしているんだから、悪い靈だよな？」

「そうだね。手に負えないほどの中靈ではないと思つよ。話せば分かつてくれる程度」

「お前達、最初から靈の存在に気付いていたな。だから、家を買いつ時に説明がなかつたかどうか、聞いたんだな」

眉間に皺を寄せた高明に、ゆずるは頷いた。

「ええ。それで、本当に何も聞かされていませんか？」

「正直に言つと、俺は靈とか、非科学的なことは信じられない方なんだけど、一つそれらしい話を聞いたことがある」

「何ですか？」

「この家に住んでいた男の子の話だ。この家には、8歳の男の子と、その子の両親が住んでいたらしい。男の子は血友病で、怪我を恐れた母親が家から出さないようにしていただらしいんだ」

「けつゅうびょう？」「

直久が首を捻つてみせると、出血が止まらなくなる病氣だという説明が入った。

なんでも、血液というのは、空氣に触れると固まるようにできているらしい。それは、血液中に血液凝固因子が含まれているからなんだって。

ところが、生まれつき、これが欠乏、又は異常のために、血が固まりにくく、出血が止まらなくなってしまう人がいる。これが血友病。

遺伝的なもので、一般的に、女性は保因者となり発病せず、男性がかかる病と言われているようだ。

「血友病の子どもに刃物を持たせたがらない母親の話はよく聞くけど、外に出さないだなんて」

「まあ、分かる気はするよな。ちょっとの怪我で出血多量死も考えられるわけだから」

「だからって。ちゃんと注意するべきことを注意していれば、普通の子どもと同じように遊べるはずなのに……」

遊びたい盛りの男の子を家の中に閉じ込めていただなんて、と数久は頭を振る。高明も頷き、話を進めた。

「学校にも通わせて貰えず、家中だけで暮らしていた男の子がある日突然いなくなってしまったんだ。当時、神隠しにあつたって騒がれたそうだ。その後、両親は離婚して、この家を出て行つたらしい」

「神隠し？」

「どんなに探しても見つからなかつたんだ。誘拐ではない。そんな痕跡はなかつたからな。もちろん、家出でもない。8歳の子どもが家出する理由がないだろ。それに、男の子がいなくなる数分前、彼が自室で眠つているのを、母親が確認している。眼を離したほんの数分の間に姿を消してしまつたらしい」

「UFOに攫われたとか？」

「真、俺は非現実的な話は苦手だ」

「高明つてば、UFOとか宇宙人の存在は否定しないけれど、UFOが地球人を攫うとかそういう話はダメなんだつてさ。宇宙は広い。広いんだから、どつかの星に知的生命体がいても全くおかしくない。だけど、宇宙は広い。広いんだから、どつかの星の彼らが地球にやつて来られるはずがない、つて」

「なんだか。夢があるんだか、ないんだか、分かんない人ですね」「放つとけ。だいたい、遠くの星からやつて来られる程の文明を持つているのなら、たかだか太陽系で悪戦苦闘している地球人の文明など、地球に着いた瞬間に侵略しているはずだろ？」

過去に西洋人がアメリカの原住民たちにそうしたよつて」「高明、高明。その話はまた今度ね。あんた、普段クールなくせに、時々饒舌になるよね。……でも、私、あなたのその偏つた思想好きだよ。なんか電波を感じる」

「感じるな」

電波受信中と言いながら、指を組んでウツトリしている怜司の隣で、高明はため息を付いた。

そんな二人の様子を見て、ゆづるが、なるほど、と呴いた。

「深沢先輩と池部先輩つて、靈に嫌われるタイプなんですね」

「靈に嫌われるタイプ？」

「靈は無視されることを恐れます。深沢先輩は端から靈の存在を無視されています。池部先輩も」

「んー。私は存在無視しているわけではなくて、居ても居なくても、どーでも良いつてカンジ」

「それ、バッヂリ無視しています」

「そう?」

「だから、靈の悪さに鈍かつたんですね」

「だからこそ、董に襲われずに済んでいる。

「や、十分悪さにあつていてる気がするけど? 私、そろそろ室内から出たいし。なんか、もう、いつそう、この窓から外に出ようかと思いつ始めたところ」

「さっきからグルグル回つているばかりだしな」

「それなら、すぐに靈の結界を破りますよ。窓から出るよつ安全です」

「ただ、そうすると靈が怒つて襲つてくるかもしれないんで、氣を付けてください」

「ちょっと待て。それなら、窓から出た方が安全じやないか? ……つて、聞いてないし」

ゆづるはその場にしゃがみ込むと、床に手を置いた。瞳を閉じる。何か呟いている。

パリン、と硝子が割れるような音が響いた。どうやら結界を破つたらしい。

これで、董に襲われる幻影を見ることも、家の中をグルグルと彷徨うこともなくなるはずだ。

木村は?

思い出して、直久は扉を開き、廊下を見やつた。階段のすぐ横を見る。木村と森岡がうつ伏せで倒れていた。

「おひつ。しつかりしろ」

駆け付けて、仰向けに直す。木村の腹はどこも裂けていなかつた。息をしている。生きているんだ。ホツと息を付いた。

そうして、辺りを見渡せば、他にも倒れている者が何人も確認できた。みんな無事だ。

「来る」

ゆづるが短く言葉を吐いた。その時だ。

バタバタバタ。足音が聞こえた。

バタバタバタ。この家に入つてすぐに聞こえたものと同じものだ。バタバタバタ。こちらに近づいてくる。

それは下の方から聞こえ、階段に駆け寄り、そして、階段を駆け上ってきた。

バタバタバタ。直久のすぐ隣を駆け抜ける。だが、姿はない。見えなかつた。

直久は足音を追つて、ゆづるたちがいる部屋の中に戻つた。

「男の子」

「この家に住んでいた子か」

ゆづると数久には靈の姿が見えているらしい。二人は身構える。

直久同様、高明と怜司には見えていないようだ。

どこを見つめて良いのやら分からず、目を空に泳がせている。

直久はゆづるの側に駆け寄つた。

「神隠しにあつたとかいう男の子なのか？　じゃあ、死んでいたってことか？」

「そういうことになるな」

「直ちゃん、下がつてて。先輩方も。ここはゆづると僕が何とかするから」

「分かつた」

靈の姿を見ることができない自分は足手まといだ。邪魔にならないうようなど、二人から離れようとした時だつた。

「なつ」

ゆづるが立つていた床が、ミシミシミシと悲鳴を上げた。嫌な予感がする。そして、次の瞬間、床が抜けた。

「わつ」

「ゆづるー」

直久は咄嗟に、ゆづるに向かつて腕を伸ばした。そうして、もうとも下の階に落ちていつた。

8・だけど、お前は女だ

空中で自分が下になるよう、ゆずるの躰を抱え込んだ。そのため、直久は背中で着地した。

「痛つ」

「直！」

「いてえー。超、マジ、いてえー」

「バカ。なんで、俺なんかを庇つたりするんだよつ
ゆづるが背中をさすつてくれた。それだけで痛みが引いてくるよ
うである。

「なんでって言われても。なんとなく……

「なんとなく？」

「んつと。ホラ。やつぱり、お前、女だし。傷なんか作つたら大変
だろ？」

「女だから？　俺が女だから？」

「気のせいいか、ゆづるが震えている。頬が赤い。

「お前は俺が女だから庇つたりするのかよつ！」

「当然だろ。普通の男はそうゆつもんだろう？」

「俺はお前に、俺が女だからって、女として見るなつて言つたよな
？　女として見ることしかできないのであれば、一度と俺の前に姿
を現すな、つて」

「ああ、言つていたな」

それは春のことだ。ゆづるが女だと知つた時に交わした会話。

直久は頭を横に振つた。

「だけど、お前は女だ。俺はそのことを知つてしまつたし、それを
忘れるようなこともない。今更、知らなかつた振りをできるほど、
器用でもないしな」

「だつたら

「

「だつたら、姿を現すな？ なんで？ ハツキリ言つて俺には、なんでお前が男として生きなきゃいけないのか、ぜんぜん理解できなによ。九堂家の当主は男でなければならないんだつて？ なんでだよ？ そんなの今の世の中じやあ、ナンセンスだろ？ 女だつて良いじゃんか。 そんでも、どーしてもつて言つのなら、養子を取れば良いことだろ？ お前が婿を取れば良いじゃん。たいたい、九堂家つて、ずっと跡取り息子が生まれてきたわけ？ 長く続いている家なんだろ？ 女しか生まれなかつた時だつてあつたはずだ。そん時も、女が男として生きるよつに決められていたわけ？」

「それは……」

ゆずるは下唇を噛み締めて、顔を背けた。

「お前には分からぬ事情があるんだ」

「ふーん。事情ね。俺には分からぬ事情なんて、俺は知りたいとは思わない。そうすつと、俺にとつてお前は、俺には無関係なお前の事情で男の振りをしていくことになる。だけど、事実、お前は女だし、俺には女としか見えない。それなのに、女としか見えないのなら、姿を現すなだつて？ ずいぶん勝手だよな」「お前が俺を女扱いして、もし、それで他の奴らにバレたら困る」「別に困らないだろ？ 女ですつて、みんなに言えぱいいじゃん。んで、女として生きろよ」

「ダメなんだ」「ダメなんだ」「なんで？」

「うるさい！ 今は、こんなくだらない話をしている場合じやないだろ。靈を」

ゆずるは天井を見上げた。穴がない。たつた今、一人が落ちてきました穴が空いていないのだ。

慌てて、辺りを見渡す。四方すべてが灰色の壁だった。

「閉じ込められた！？」

「ヤバイのか？」

「あの程度の靈の結界なら、すぐに破れる」

「そつか。なら、大丈夫だな」
ゆづるはその場にしゃがみ込み、先程そつしたように、床に手を置いて結界を破ろうとした。

だが、その手を直久が制する。

「話は終わってない」

「なんの話だ?」

「今、たつた今まで、話していた話だよ」

「知らない」

「……」

「だんだん、ムカついてきた。

グッと力を込めて、ゆづるの手を握る。ゆづるは顔を顰めた。

「放せ、馬鹿力」

「俺はお前が嫌いだ。見てるとムカムカしてくる。すっげえ、ムカツク。お前を見ていると、焦れつたいんだよ。なんでだよ、って思う。すっげえ、気になるんだ」

「放つておけば良いだろ? 俺が嫌いなら……」

「嫌いじゃねえよつ!」

直久は真つ直ぐにゆづるの瞳を見つめた。

嫌い。大嫌いゆづる。

自身で『嫌いなのか?』と問いかければ、即答で『嫌い』と答えることができる。

だけど、ゆづるから問われれば、否定したくなる。

嫌いじゃない。

嫌いであり続けたいと思つていた。だけど、それは無理なことだつた。

「お前やー、もつとしつかりした奴だと思つていた。だけど、なんか危なつかしいし、見ていると、思わず、手が出ちゃうんだ。これ、もう、無意識だから。条件反射つーの? 俺の意志関係なしに、気付いたら、お前を助けようと躰が勝手に動いちゃつているんだ」

「……」

「俺、きっとお前の事が好きなんだよ」

従姉のゆずる。大嫌いなゆづる。嫌いで嫌いで、気になつて仕方がなかつた。

「好きだ」

低く、静かに言い放つと、ゆづるは驚いたような顔をした。そして、その顔は次第に哀しげになつていいく。

「お前は、俺が女だと知ったとたんに、そういうことを言つんだな」「ゆづる？」

「気持ち悪い」

直久は息を呑んだ。何と言つ返したら良いのか、分からなかつた。

「いめん」

靈に閉じ込められた空間から脱出すると、再会した数久にすぐさま謝られた。

「説得しようかと思つたんだけど、交渉決裂しちやつた」

「それで、逃げられたのか？ 答案無用で除靈しないからだ」

お優しい数久のポリシーは、『靈に自ら成仏させる』なもので、まず話し合いをするのが数久のやり方なのだ。

ゆづるは先見を喚んだ。

「靈を見つけてくれ。いいから、早く行け！」

つるさそうに、片手を振つて先見を追い払う。直久には先見の姿が見えないので、どのようなやり取りをされているのかは、不明である。

しばらくあつて、ゆづるが駆け出した。びつやら、靈を見つけたらしい。直久も後を追つた。

そこは、子ども部屋だった。小さなベッド。小さな本棚、そして、

勉強机。

他の部屋の荒れようと比べ、この部屋だけは異様に綺麗だった。まるで、今でもそこに子どもが生活しているかのようだ。

やはり追ってきた数久が印を結んだ。空気が変わる。結界を張つたらしい。

これで、この場所は、ゆずると数久が有利とする空間となつたのだ。

不意に声が響いた。子どもの声だ。

『外に出てみたかつただけなのに』

どこから？

姿を探して、辺りを見渡す。気配が身動きした。直久はベッドの下を覗き込んだ。

いた！

しかも、バツチリ見えたのだ。白塗りでもしたかのように異様に白い顔がベッドの下に浮いて見える。血走った目をギョロギョロさせて、直久達を見上げていた。

『外に出てみたかつただけなのに』

男の子は直久達が見守る中、ベッドからぬつくつと這い出て來た。

ピシャン。

この場に不似合いな水音に、直久はハツとする。男の子は全身びしょ濡れだった。

歩く度に水が滴り、床に足跡が付いた。

ピシャン。

男の子は窓際に寄る。外を眺めた。

『外に出てみたかつただけなのに』

窓から外へ身を乗り出した。一瞬、螢の光が見えた気がした。

そうして、気付いた時には窓の外に両足が見え、下へ下へと落ちていった。

慌てて窓に駆け寄り、下を見やつた。暗闇だった。

「直ちゃん、下に降りてみよう

北西の隅の部屋に梯子を立て掛けた。そこから、庭に降りるようのこと。それがこの部屋だったのだ。

直久は梯子を降り、庭に立った。男の子を捜して、辺りを見渡す。

「じつちだ」

ゆずるが先だって駆け出した。

家に沿って庭を行くと、池がある。ゆずるは池の前で足を止めた。

黒ずんだ水。ひどく臭う。

「この池は、母親が男の子を慰めようと/orして、造らせたものみたい。蛍を飼っていたんだ」

「蛍を？　だけど、蛍って、綺麗な水にしか棲まないんじゃ」

「元々は綺麗な池だつたんだよ」

ゆずるは池の中に手を突っ込んだ。すると、見る見るうちに、水が澄んでいく。

「見ろ。見つけた」

澄んだ水の中、男の子が上を見上げているのが見えた。

水を吸った躯はふやけ、大きく膨らみ、もはや人の形を留めてはいないが、確かにそれはあの男の子だった。

「外に出たくて、窓から飛び降りたんだ。そしたら、蛍の光が見えて、この池に来た」

「そして、この池に落ちた」

「不意に死にたくなったみたい。生きている意味を見失つて。

だけど、死ぬのは苦しくて、怖くて、思い直して助かるうとしたんだけど、水草に足を取られ、結局、溺れちゃつたんだね。可哀想に。誰にも見つけて貰えなくて、ずっと、ここにいたんだね」

「だからって、ひでえ悪さするよな

「な、直ちゃん！？」

「ガキだからって、甘つたれんなよ。俺はなあ、マジで、ダチや仲間が虫」ときに喰われちまつたのかと思つたんだからな。ダチを失うのかと思つたら、すっげえ怖かつたし、そん時に何もできなかつ

た自分がすっげえムカついた』

直久は池の中を覗き込んで、尚も大声を張り上げた。

『家から出たかったんなら、母親にちゃんとそう言えれば良かつたんじゃねーか。ちゃんと向き合って、言えば良かつたんだよ。自分の人生だろ？ 自分でどうにかしてみろよ！』

バシャン、と池の水が波立った。白い顔が浮かび上がる。ジロリと直久を睨んだ。

『だから僕は壁を破つたんだ。自分の力で！』

男の子の靈が悲鳴を上げる。

靈が怒ると温度が下がると言つが、確かにそんな気がしてきた。ぞつと鳥肌が立つ。

だが、直久だって負けない。

『なんだよ、壁つて！？ 次元を距てる壁か？』

鈴加の話に出てきた『壁』のことだ。

この世とあの世、そして、他の多くの世界とは次元が異なるとう。だからこそ、世界は交じり合わない。鈴加は、次元を『壁で区切られた空間』と例えていた。

直久は靈を睨み返した。

「それとも、能力の壁か？ 年齢の壁。性別の壁。『壁』つつもな、いろいろあるじゃねーか。お前は、破る壁を間違えたんだよ…』

不意に死にたくなつただつてえ？！ ふざけるな！ 死んでどうする？ 死んで！

「お前、まだ8歳だつたんだろ？ なんで死のうだなんて思つんだよ。まだまだ人生長いじゃないか」

『生きていても面白くないから』

『死ねば楽しい事が待つてているのかよつ』

『待つてなんていなかつた……』

『だろ？』

『生きたい。もっと生きたい』

直久はゆづるに振り向いた。ゆづるは首を横に振る。

「お前はもうあちら側のモノなんだ。お前が破り、通り抜けた『壁』は、もう一度と通り抜けることを許されないものだったんだ」

「……でも、大丈夫だよ。転生システムがあるから」

「数。なんだ、それ？」

弟のあんまりの言葉に、直久は顔を引きつらせた。

おそらく生まれ変わりのことだと思う。鈴加の知り合いに、前世の記憶があるという人がいるらしいから、本当に人は生まれ変わりをするのだろう。

「靈界で魂を清めたら、また生まれ直すことができるんだって」

『本当に?』

「うん」

納得したのか、男の子は顔に笑みを浮かべた。

ゆづるが瞼と閉ざし、印を結んだ。空が歪んだ。その空を指す。

「行け。お前のあるべき場所に！」

9・入つて、生まれ変わるんだよな？

「ただいま」

憎たらしい程の笑顔に、直久は額に青筋を立てた。

「鈴加、てめー！」

「姉さん、また屋根吹っ飛ばしちゃったの？」

「そうみたいね。いやだわ、目測を誤ったみたい。でも、我ながら上手くできた方じゃない？」

至極満足そうである。

鈴加はこの夏、念願の異世界旅行を実行した。たった今、異世界から帰ってきたのだが、次元をねじ曲げた影響のためか、ひどい突風が吹き荒れた。

そのせいで、我が家家の屋根が吹っ飛び、ついでに、直久も空高く吹き飛ばされ、神社の砂利の上に叩き付けられたのだ。

母親の絶対命令で、境内の掃除をしていた双子たちは、突然現れたこの姉に駆け寄った。

「どうだったの？ 異世界は」

「楽しかったわよ。はい、おみやげ。『玉璽饅頭』よ

「ぎょくじまんじゅう？」

「玉璽を押したような焼き印を押されているのよ」

「へー」

「そつちはどうだったの？ 肝試し」

饅頭を受け取りながら、直久は顔を引きつらせた。

「本物が出てきて、おじやん。 後日、仕切り直しもしたけど

「本物が出て来ちゃったの？」

「数が説得して、ゆするが除霊した」

「説得したのは、直ちゃんだよ。僕は何もしていないよ」

「直久は鈴加を見やる。」

「人つて、生まれ変わるんだよな？」

「そららしいわね」

「なら、良い。あのガキも生まれ直して、やり直せるのなら」

今度は死のうなどと思わないような人生を生きて欲しい。

疾風のせいで遠くの方に転がってしまった竹箒を取りに行こうと、

直久は歩き出す。

「直久。事情はよく分からぬけど、人はね、何度も生まれ直しても、同じ過ちを繰り返すのよ」

「え？」

「因果応報って言うのかしら？ 前世の行いが来世に影響するって言つわ」

直久は歩みを止め、鈴加に振り返る。

「前世での人間関係を来世にも持ち越すんですって。親子関係、夫婦関係、友人関係。それらは、何度も生まれ直しても変わらないんですね」

「それがマジだとすると、あのガキは生まれ直しても、同じ母親から生まれ、同じように病氣で、また家に閉じ込められたりするのか？」

そして、自ら死を選ぶのだ。

「嘘だつ！」

そんなの、惨すぎる。

直久は竹箒を見やつた。目を凝らせば、柄の部分が無惨に折れているのが見えた。

もはや掃除をする気などない。直久は踵を返した。

「直ちゃん、どこに行くの？」

「体育館！」

近所の体育館でバスケをしに行つてくると言い捨てて、直久は石階段を駆け下りた。

運が良ければ、高明に会えるかもしない。彼はよくその体育馆で練習をしているのだ。

「直ちゃん、僕も行くよー。」

「ついて来るなっ！」

「……」

「数、お前は知っていたのか？ 知っていて、あんなことと言ったのか？」

「ああでも言わなきゃ……」

「知っていたんだな」

ゆづるは？と聞きかけて、直久は口を開いた。知らないはずがないのだ。

「直久」

鈴加が階段の方から、見下ろしている。
竹箒を手にしている。あの、折れたはずの竹箒だ。
だが、どこも折れていない。きっと直したのだろう。それくらい鈴加にはわけないことだ。

「誰にも、どうすることも出来ない事があるのよ。どうしても割り切れないことが」

「何だよ、それ」

「ゆづる君だつて、あの子自身でも割り切れない理由で、ああい生き方しているのよ」

「割り切れない理由？ 誰にもどうする」ともできないだって？
誰もどうもしないだけだろ？」

だったら、俺が。

直久は一人に背を向けて、再び駆け出した。

本家である朝霧神社に行き着いた。無意識だつた。
体育館に行くつもりだったのに、何故かここに足が向いてしまつた。

「ゆづる」

この時間帯は掃除の時間なのか、ゆづるも竹箒を手に境内を掃除していた。

直久の呼び声に、ゆずるがゆっくつと振り向く。

「直」

「ゆずる。俺、お前に、好きだつて、言つたよな？」
駆けてきたため、息が切れている。直久は両手を膝に着き、前屈みになつて、ゆずるの表情を見ずに言つた。

「俺、まだ、返事、聞いてない」

「返事？」

耐えられないと、直久は地べたに尻を着いた。
尻の横に両手を着いて、空を仰ぐ。青い。

「好きだ」

「直……」

「もう、お前が男でも女でも、どうでもいいやつてくらいに、好きだ。だけど、いつか、俺が何とかしてやる。お前が女として生きられるようにしてやる。だから、お前も俺の」と、好きになれ」

「……」

直久はゆずるの顔を盗み見た。ゆずるはジッと瞼を閉ぢていた。

壁。

おそらく、人と人の間にも、それぞれ壁があるのだらう。
だから、こんなにも、自分の気持ちは相手に伝わりにくい。
相手の気持ちだって、自分はまったく理解できない。

壁なんて、なればいい。

だけど、壁はある。

あるからには、あるだけの理由があるのだろう。

壁。

壁は、どこにでもある。
だが、どこにもない。

探しても見つかるような物ではないが、ないと想つて足を進めて
いると、ぶち当たるような物だ。

そのことを、誰もが知っているはずなのに、壁に気付けるものは
少數だ。

【完】

9・人って、生まれ変わるんだよな？（後書き）

『月読み』(<http://nocode.syosetu.com/n6763d/>)へ続く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6689d/>

虫狩り

2010年10月8日14時29分発行